

青森県埋蔵文化財調査報告書 第588集

三内丸山遺跡44

総括報告書 第2分冊

2018年3月

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書 第588集

三内丸山遺跡44

総括報告書 第2分冊

2018年3月

青森県教育委員会



陸奥湾と青森平野を望む三内丸山遺跡



八甲田山と青森平野を望む三内丸山遺跡

例 言

- 1 本報告書は平成4～6年度の三内丸山遺跡の発掘調査などをはじめとする既刊の調査報告等について総括した報告書の第2分冊であり、平成29年度の国庫補助金を受けて作成した。
- 2 三内丸山遺跡は青森県青森市大字三内字丸山及び大字安田字近野に所在し、青森県遺跡番号は201021番である。
- 3 本書の執筆にあたり、遺構及び遺物の年代については下表のように、可能な限り帰属する時期の土器型式を用いて記載し、それ以外は縄文時代前期中葉や後葉などの標記とした。土器そのものの年代観等については第3章第1節に、年代測定等の記録については第4章第1節に記載してある。

時期区分	時期細分	型式名	報告書の分類	年代 (CalBC) (辻 2001ほか)	年代 (CalBC) (小林 2005ほか)	年代 (CalBC) (國本田 2012)
早期		早期	I			
前期	初頭～前葉	前期初頭	II-1			
	中葉	円筒下層 a 式	II-2	3,950	4,050～3,930	3,650
		円筒下層 b 式	II-3		3,950～3,700	3,350
	後葉	円筒下層 c 式	II-4			
	末葉	円筒下層 d ₁ 式	II-5-1			3,500～3,400
円筒下層 d ₂ 式		II-5-2		3,400～3,360		
中期	初頭	円筒上層 a 式	III-1	3,450	3,360～	3,350～3,050
		円筒上層 b 式	III-2		～3,350～	
		円筒上層 c 式	III-3		3,300～3,100	
	前葉	円筒上層 d 式	III-4			3,050～2,900
		円筒上層 e 式	III-5	2,950	3,300～3,000	
	後葉	榎林式	III-8		～2,900～2,880～	2,900
		最花式	III-9		2,820～2,650	2,580
	末葉	大木10式併行	III-10		2,650～2,300	
後期	後期	IV	2,150～2,250			
晩期	晩期	V				

※ほかに、
 II-6：下層式で細分型式が不明
 III-6：上層式で細分型式が不明
 III-7：大木8a式以前の大木式土器系
 III-11：III-8～10で細分型式が不明
 の分類項目がある。

小笠原作表、詳細は第3章第1節及び第4章第2節参照

- 4 挿図の縮尺は各図に示したが統一はしていない。また、写真の縮尺も統一していない。
- 5 本遺跡の遺構番号は種類毎に通し番号を付してあるが、既刊の報告書で「竪穴住居跡」として報告したものについては「竪穴建物跡」と標記の名称のみを変えた。
- 6 遺構及び遺物図面の記載は、既刊の報告書と同様である。
- 7 挿図番号については各章の通し番号とした。第5章の3番目の図は「図5-3」とした。
- 8 測量原点の座標値は、旧日本測地系に基づく平面直角座標第X系によるが、平成23年東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）前の座標値であり、補正していない。標高値も東日本大震災前の標高

値を基準としており、同様に補正していない。

- 9 挿図中の方位は座標北を示し、複数の遺構が同図内に示されるときは遺構毎に方位を示した。
- 10 遺構内外の堆積土の注記は、『新版 標準土色帖』（小山・竹原2006）を用いた。
- 11 縄文原体は、『日本先史土器の縄紋』（山内1979）を参考に分類し、記述はそれに従った。
- 12 層位名は基本層位を「Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ…」などのローマ数字、遺構内堆積土層位を「1・2・3…」などの算用数字で表記している。
- 13 引用参考文献のうち、第6節の分は文末に、第1～5・7節は巻末に項目別・遺跡・出土地点別にまとめて記載した。
- 14 引用参考文献のうち、青森県教育委員会が作成したものについては、編集機関別に、青森県教育庁文化財保護課（旧文化課も含む）編集と、青森県埋蔵文化財調査センター編集の報告書があるが、ともに「青森県教育委員会」と表記した。
- 15 写真等ご提供いただいた機関名等は各図版内で提示している。
- 16 本書の執筆は、青森県企画政策部理事 岡田康博、青森県教育庁文化財保護課総括主幹 小笠原雅行、同文化財保護主査 岩田安之、同 齊藤慶吏、同 粟天唯正、青森県埋蔵文化財調査センター総括主幹 齋藤 岳、同文化財保護主幹 茅野嘉雄、同 永嶋 豊、同文化財保護主事 藤原有希が担当し、執筆者名を文末に記した。以下については執筆を依頼した。
 - 第2節第1項 奈良文化財研究所名誉研究員 岡村 道雄
 - 第2節第2項 東京大学大学院 教授 辻 誠一郎
 - 第2節第3項 国立歴史民俗博物館 名誉教授 西本 豊弘
 - 第2節第4項 東北大学 名誉教授 鈴木 三男
 - 第2節第5項 前秋田県立埋蔵文化財センター所長 小林 克
 - 第2節第6項 奈良文化財研究所 都城発掘調査部長兼考古第一研究室長 玉田 芳英編集は青森県教育庁文化財保護課文化財保護主査 佐藤真弓、同文化財保護主事 長谷川大旗が行い、青森県教育委員会が作成した。
- 17 発掘調査及び報告書刊行における出土遺物及び実測図、写真等の記録類は、現在、青森県教育庁文化財保護課三内丸山遺跡保存活用推進室が保管している。

第2分冊目次

例言

目次

第2分冊

第5章 総括～円筒土器文化圏における三内丸山遺跡～	1
第1節 遺構	3
第1項 建物跡	3
1 竪穴建物跡	3
2 掘立柱建物跡	18
第2項 土坑	24
1 貯蔵穴	24
2 その他の土坑	26
第3項 墓	29
第4項 捨て場(縄文時代前期)	39
第5項 盛土(縄文時代中期)	44
第2節 遺物	53
第1項 前期の土器(円筒下層式土器)	53
第2項 中期の土器(円筒上層式土器と大木系土器)	63
第3項 石器	72
第4項 土偶と岩偶	87
第5項 土製品と石製品	97
第6項 骨角器	114
第7項 漆製品	123
第3節 交流・交易	129
第4節 生業	137
第1項 採集	137
第2項 漁撈	142
第3項 狩猟	151
第5節 集落	157
第6節 日本列島における円筒土器文化-他文化圏との比較の視点-	170
第1項 縄文文化の特徴-縄文文化を構成する地域文化圏とその東北アジア史的位置-	170
第2項 環境史から見た円筒土器文化	191
第3項 三内丸山遺跡の生業の特徴	207
第4項 森林資源利用に見る円筒土器文化の特徴	211
第5項 三内丸山遺跡の盛土遺構	225
第6項 西日本からみた円筒土器文化	238
第7節 総括	246
引用・参考文献	258
円筒土器文化圏の主な遺跡と縄文時代の国史跡位置図	267
付図3 旧野球場建設予定地埋設土器遺構配置図(S=1/120, 1/500)	
付図4 埋設土器の遺構配置図(S=1/400, 1/2,000)	

第1分冊目次

序 例言 目次

第1分冊

第1章 調査の経過	1
第1節 江戸時代から昭和までの調査	3
第2節 平成の調査	6
第1項 調査に至る経緯と経過	6
第2項 発掘調査の方法	10
第3項 整理作業の方法	11
第3節 遺跡の位置と層序	14
第4節 調査地点と成果一覧	24
第2章 検出遺構	31
第1節 建物跡	33
第1項 竪穴建物跡	33
第2項 大型竪穴建物跡	40
第3項 掘立柱建物跡	44
第4項 大型掘立柱建物跡	47
第2節 道路跡	50
第3節 墓	54
第1項 土坑墓	54
第2項 環状配石墓	58
第3項 埋設土器	63
第4節 配石遺構	69
第5節 土坑（貯蔵穴）	71
第6節 竪穴遺構（粘土採掘坑）	76
第7節 水場遺構	78
第8節 捨て場と盛土	81
第1項 捨て場（縄文時代前期）	81
第2項 盛土（縄文時代中期の捨て場）	85
第9節 溝状遺構	94
第10節 集落の変遷	95
第3章 出土遺物	101
第1節 土器	103
第1項 三内丸山遺跡の土器	103
第2項 円筒下層式土器	104
第3項 円筒上層式土器	110
第4項 大木系土器（榎林式土器・最花式土器・大木10式併行期の土器）	115

第2節	石器	119
第3節	土偶	124
第4節	岩偶	134
第5節	土製品	139
第6節	石製品	141
第7節	骨角器	145
第8節	木製品	153
第9節	編組製品	157
第4章	自然科学分析	159
第1節	年代測定	161
第1項	放射性炭素年代測定	161
第2項	年輪年代測定	168
第2節	生業と環境復元	169
第1項	漆	169
第2項	動物骨	172
第3項	魚骨・貝類	176
第4項	木材	181
第5項	種実類	185
第6項	昆虫	191
第7項	珪藻・花粉・植物珪酸体	194
第8項	DNA分析	201
第9項	安定同位体分析	203
第10項	土壌分析	205
第11項	赤色顔料	207
第12項	石器の用途・使用痕	209
第3節	産地推定	215
第1項	玉材	215
第2項	黒曜石	217
第3項	石斧	222
第4項	そのほかの石器石材	223
第5項	土器・土偶胎土分析	225
第4節	まとめ	227
附表		
	掲載遺構一覧	233
	掲載遺物一覧	238
	自然科学分析一覧	248
	引用参考文献	251
付図1	三内丸山遺跡全体図 (S=1/1,500)	
付図2	旧野球場建設予定地遺構配置図 (S=1/500)	
抄録		257



第5章 総括

～円筒土器文化圏における三内丸山遺跡～

第5章 総括～円筒土器文化圏における三内丸山遺跡～

第1節 遺構

第1項 建物跡

1 竪穴建物跡

円筒土器文化圏における大型を含む竪穴建物跡について述べる。第2章第1節第1項で見たように、時期別に竪穴建物の形態は変化し、北海道南部・青森県・岩手県北部・秋田県北部の地域ごとに相違点はあるが、大枠では運動しながら推移する。

以下では上記それぞれの地域ごとにその特徴及び時期的変化について述べる。

(1) 北海道南部 (図5-1・2)

北海道ではその南部地域、渡島半島が円筒土器文化圏である。道南部は旧南茅部町を中心とする噴火湾側、函館市を中心とする津軽海峡側において、多くの竪穴建物跡の調査が行われている。この地域での円筒土器文化期の竪穴建物跡の特徴は、縄文時代前期中葉・後葉の竪穴建物跡プランの外側に見られる「外柱穴」、前期末～中期前葉に盛行し、日ノ浜型の竪穴建物跡に代表される「テラス状遺構」および「五角形構造の床面」、中期後葉(大安在B式期)の所謂「舟形プラン」や「中央ピット」と呼ばれる床面中央の土坑があげられる。

縄文時代前期中葉(図5-1)には長径3.0m以下の竪穴のプラン外側に柱穴が巡る例(1・2)があり、土坑か建物跡かの判断が難しいものが散見される。同時期の集落としては函館市八木A遺跡があり、不整形の竪穴中央に地床炉を有するもの(3)やテラス状遺構が全周し、テラス内側に6基の主柱穴と地床炉が配されるもの(4)がある。後者は前期後葉に特徴的な構造である。

縄文時代前期中葉から後葉(円筒下層b式期からc式期)にかけては2基の主柱穴構造が見られ、前期後葉(円筒下層c式期)には検出数が少ないが、4基の主柱穴の中央に土坑1基を有するもの(5・6)がある。また、前期後葉から末葉(円筒下層d式期)に中心があるテラス状遺構が全周または一部に築かれる竪穴建物跡が中期前葉までみられる。それらには床面の長軸の一端に特殊施設のような土坑が伴う。前期段階は地床炉が用いられるが、先述の(5・6)のように床面中央に焼土や炭化物の残存が見られない掘り込みがあり、これも炉跡であったのかもしれない。

縄文時代中期前葉(図5-2)の竪穴建物跡は前期からのテラス状遺構を有する床構造を受け継いでおり、円筒上層b式段階まで僅かに見られる(2)。

縄文時代中期中葉(サイベリVII式期)の竪穴建物跡は、青森県域と共通性が高い。先端ピット(特殊施設)、楕円形プランは中期後葉(榎林式期)にまで継続している。

縄文時代中期後葉(最花式併行の大安在B式期)の竪穴建物跡は、「舟形」と称されるプランを呈する。先端ピットを有し、向かい合う柱穴が4～8基程度見られ、先端ピットに近い位置に石囲炉が見られるものが多い。14は四角い石囲炉が設けられ、そのコーナー部より、「ウイング」と称される石の配列が延びる。一部には住居中央部に穿たれた「中央ピット」と呼ばれるものもあり、理化学分析の結果、胎盤埋納の可能性が指摘されている(南茅部町教育委員会2002)。

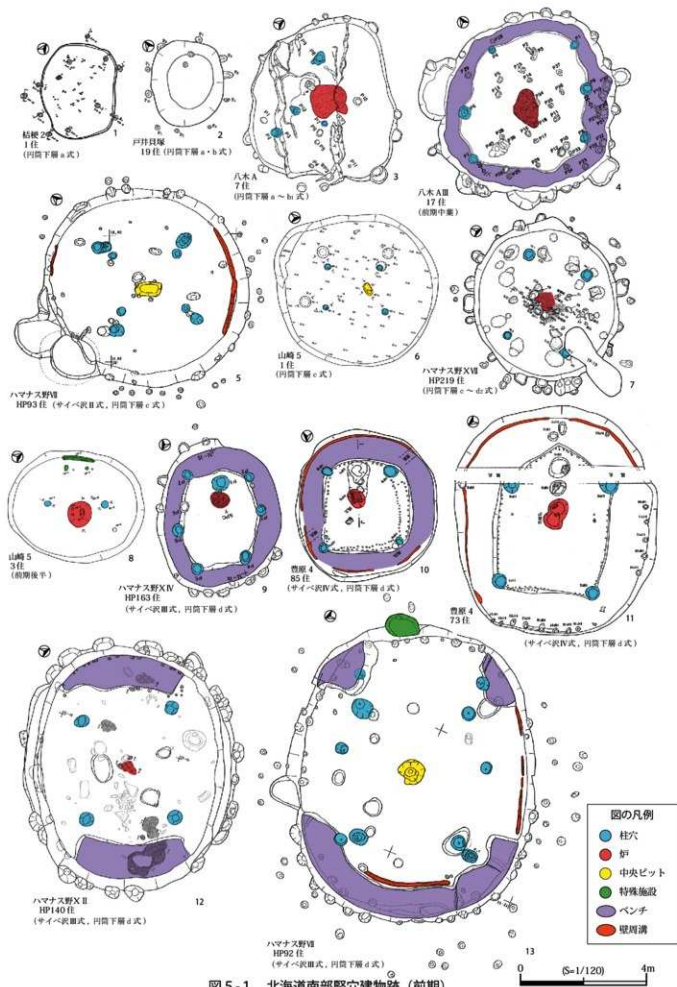


図5-1 北海道南部竪穴建物跡（前期）

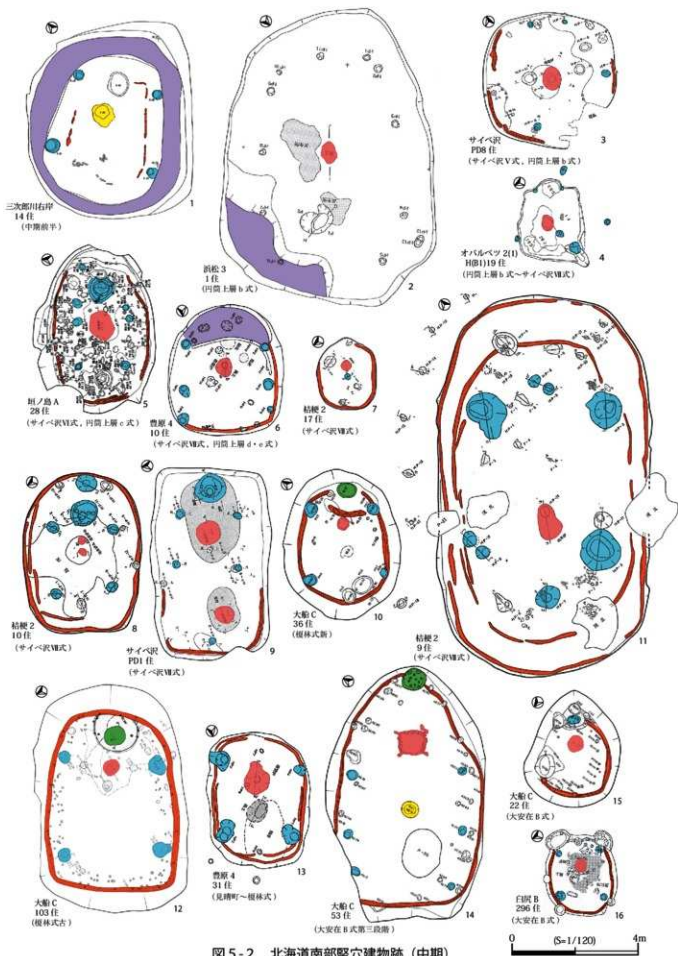


図5-2 北海道南部竪穴建物跡(中期)

(2) 青森県西部 (津軽地方) (図5-3)

三内丸山遺跡については、別項(第2章第1節第1項)に譲る。ここでは他の津軽地方の円筒土器文化期および直後の竪穴建物跡を述べるが、概ね、三内丸山遺跡と同様の変遷を辿る。

縄文時代前期中葉には、主柱がない例も多いが、地床炉あるいは炉の可能性のある中央土坑の両側に、一対の主柱穴が配される2基主柱穴の構造が目立つ。プランは、円形・楕円形・長方形がある(1~3)。またこの時期にすでにテラス状の床面2段構造が一部・全周に巡る例がある(4・5)。

縄文時代前期後葉には、竪穴建物跡が増加する。この時期にも2基主柱穴構造がある(6・7・10)。大型の竪穴建物跡も見られ、青森市新町野遺跡では5棟の大型竪穴建物跡が検出されている。新町野遺跡第36号住居跡は、テラス状の床面2段構造に主柱穴6基がみられるが、長軸中央にロームが貼り付けられた土坑があり、その両側に2基の地床炉がある(8)。ほぼ同時期の山間部に位置する青森市岩波小谷(4)遺跡では幅広い大型に近い4基主柱穴の竪穴建物跡が検出されている(9)。付近の青森市二股(2)遺跡でも前期後半の大型竪穴建物跡が調査されている。

縄文時代前期末葉~中期前葉にはテラス状の床面2段構造が特徴的である(11)。中期前葉(円筒土層a式期)の蓬田村山田(2)遺跡の竪穴建物跡は、壁際に主柱穴を有する長方形や楕円形のものである(12)。

三内沢部(1)遺跡は三内丸山遺跡の川を挟んだ対岸の集落であるが、縄文時代中期前葉・中葉には、周堤炉や特殊施設(壁に近い位置に築かれる土坑およびそれを囲う周堤など)を有するもの(16)ほか、外柱穴が検出されているものがある(13~15)。

縄文時代中期後葉(榎林・最花式期)になると卵形プランに、炉が長軸の一方に寄る例が見られる(18)。

(3) 青森県東部 (南部地方) (図5-4)

南部地方でも、縄文時代前期を通して床面中央の炉や土坑の両側に1対の2基主柱穴構造の竪穴建物跡が見られる(3)。少数であるが、出入口施設が竪穴建物跡外側へと伸びる例も前期中葉に確認されている(1・4)。前期後葉にはテラス状の床面2段構造の例もある。八戸市畑内遺跡や同市重地遺跡では大型竪穴建物跡が検出されており、壁近くに6~10基程度の主柱穴が並び、地床炉や土器埋設炉が構築されている。

八戸市笹ノ沢(3)遺跡は縄文時代中期前葉にはほぼ限定される大集落である。主に楕円形の竪穴建物跡が多く検出されている(9)。

この地域でも縄文時代中期中葉には特殊施設が築かれるものが見られ、次の中期後葉(榎林式・最花式期)の竪穴建物跡にも浅い土坑や張り出しとして残る。津軽地方同様に、中期後葉(榎林・最花式期)の竪穴建物跡は卵形プランであり、地床炉・石囲炉が長軸片側に寄っている。

(4) 秋田県北部 (図5-5・6)

秋田県は米代川流域が円筒土器文化圏である。縄文時代前期中葉例は、大館市池内遺跡に顕著である。楕円形プランに周溝が全周するものがあり、中央掘り込みの両側にある2基主柱穴構造の竪穴建物跡はここでも見られる。

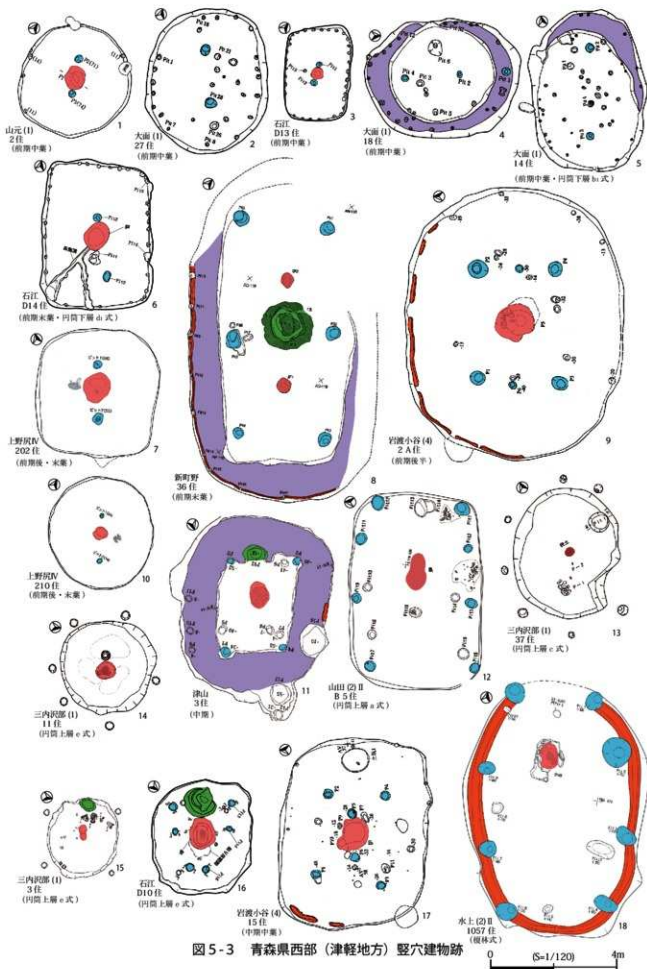


図 5-3 青森県西部（津軽地方）竪穴建物跡

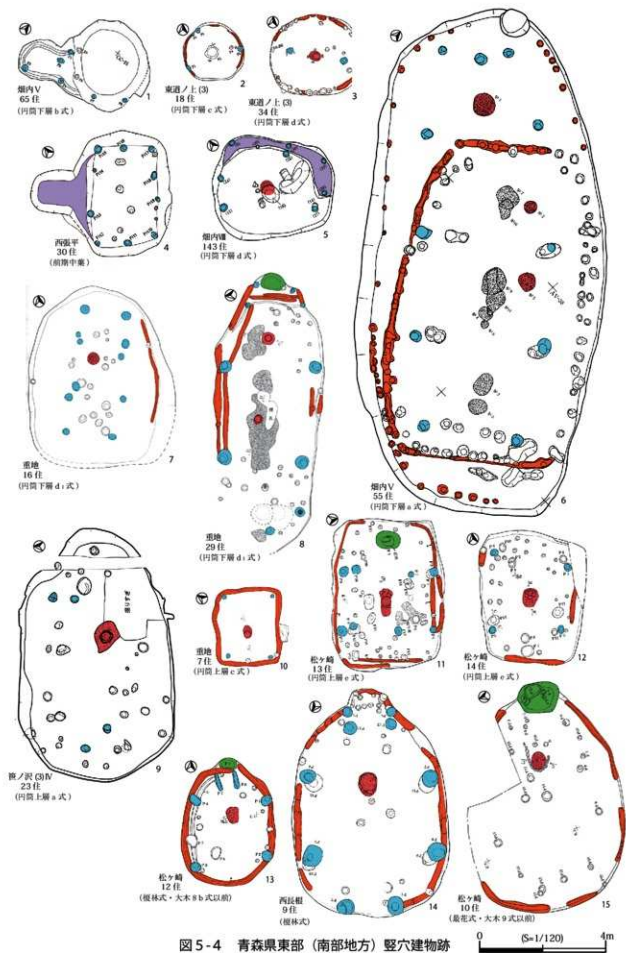


図5-4 青森県東部(南部地方)竪穴建物跡

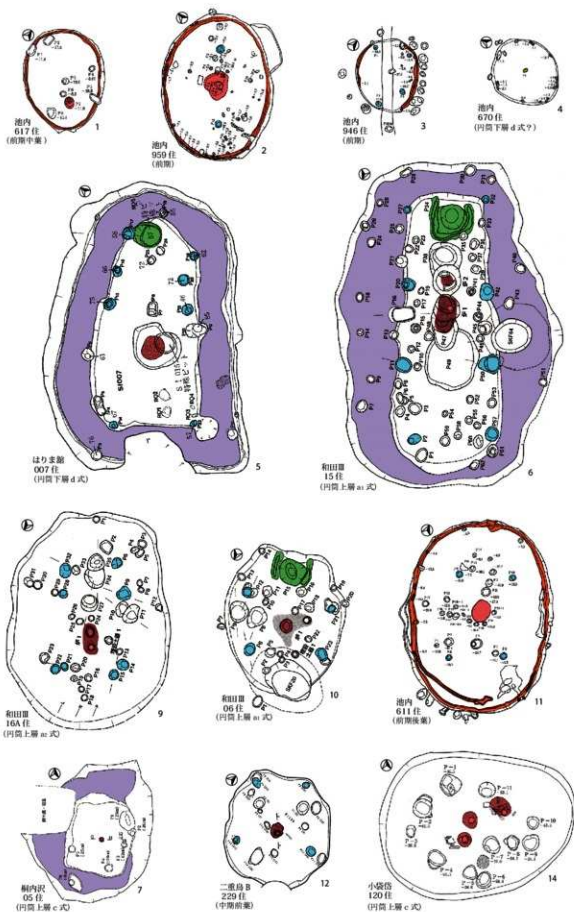


図 5-5 秋田県北部竪穴建物跡 1

0 (S=1/120) 4m

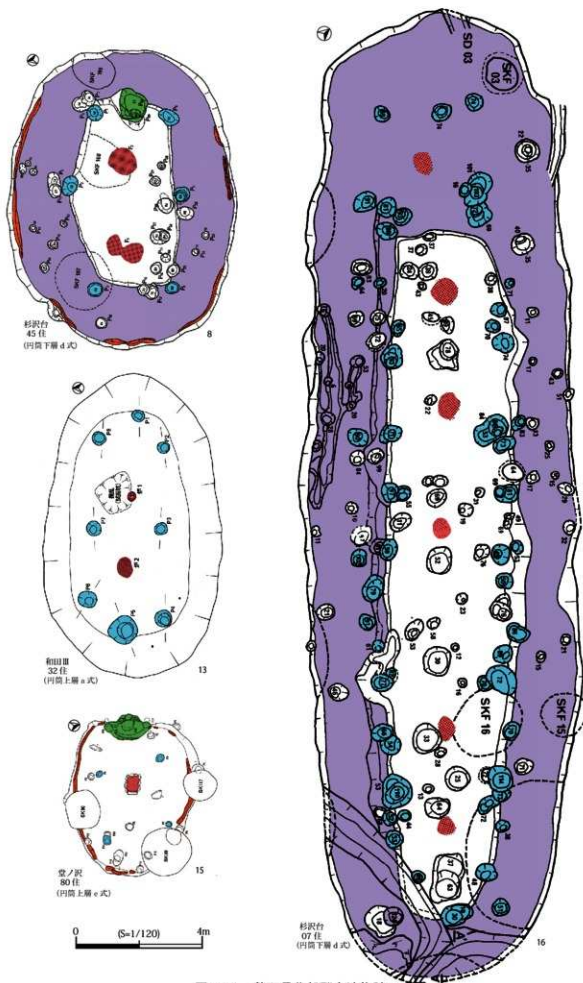


図5-6 秋田県北部竪穴建物跡2

縄文時代前期末葉～中期前葉の、テラス状の床面2段構造の堅穴住居跡は、この地域にもある(5・6・8)。前期末葉(円筒下層d式期)の小坂町はりま館遺跡例(5)は、床面が五角形で、その外側に主柱穴が並び、特殊施設を有する。道南地方の日ノ浜型と共通する構造である。

能代市杉沢台遺跡や池内遺跡には、多くの大型堅穴建物跡がある。前期末葉の杉沢台遺跡第7号住居跡(16)は、長軸31mの大規模な堅穴建物跡であり、床面は2段構造である。一方、8のように長幅比がより小さいタイプも見られる。

縄文時代中期前葉例は円筒土器文化圏の南限付近に位置する三種町和田Ⅲ遺跡にみられる(9・10)。楕円形プランに、中央の地床炉あるいは地床炉のような掘り込みを囲った4基柱穴構造である。北秋田市二重島B遺跡例も同様の構造であるが、主柱が壁際に配されている(12)。和田Ⅲ遺跡6号住居跡も、楕円形プランに4基主柱構造であるが、長軸の一方の壁に両側に高まりを有する土坑が築かれ、中期中葉に盛行する特殊施設の先行例と考えられよう。さらに和田Ⅲ遺跡では、長楕円形の大型堅穴建物跡が2棟検出されており、床面2段構造と無段のものがある。13は無段タイプのもので、壁際に6基の主柱穴があり、長軸中央両端に棟持柱様の2基の柱穴が配置されている。長軸上には地床炉と土器埋設炉が1基ずつ構築されている。

縄文時代中期中葉(円筒上層e式期)の類例は、大館市堂ノ沢遺跡で検出されている。楕円形プランと石囲炉を囲う4基主柱穴構造に加え、長軸上の壁際には特殊施設も構築されており、この時期に特有の構造である。

(5) 岩手県北部 (図5-7)

岩手県域は、馬淵川・新井田川および北三陸地方が円筒土器文化圏である。青森県境に近い軽米町大日向Ⅱ遺跡や馬淵川上流域の一戸町御所野遺跡、北三陸地方の普代村力持遺跡で多くの堅穴建物跡が検出されている。

縄文時代前期中葉の堅穴建物跡の検出例はあまり多くは無いが、大日向Ⅱ遺跡では四角形プランの壁際に主柱が2基配されるものがある(1)。

縄文時代前期後葉には検出例も増加し、円形や長方形プランの床面中央の石囲炉を囲う4基主柱構造のもの(2)や壁柱穴が巡るもの(3～5)がある。大日向Ⅱ遺跡では、前期中葉と後葉の複数回に渡る建替えがなされた大型堅穴建物跡が検出されている。(7)は6回以上の建替えが想定される前期中葉の例であるが、壁際には10基の主柱穴が、長軸の中央ラインには数基の地床炉がある。

縄文時代中期前葉も円形あるいは楕円形のプランを呈し、中央の地床炉を囲う4基主柱構造が見られる。円筒土器文化圏の南限付近に位置する岩手町秋浦Ⅰ遺跡でもこの時期の堅穴建物跡が検出されており、隅丸長方形プランの中央に石囲炉を有するもの(10)や不整形プランのやや壁寄りに石囲炉が位置するものがある(11)。北三陸地方の野田村平清水Ⅱ遺跡例(12)も同様の例であるが、長軸上にも棟持柱のような柱穴がある。

縄文時代中期中葉例は、御所野遺跡で多く調査がなされている(13～17)。隅丸四角形および長方形プランに、地床炉や石囲炉のほか、土器片敷土器埋設炉など多様な炉が見られる。円筒土器文化圏の堅穴建物跡に特徴的な壁際の特殊施設も見られる。この後、御所野遺跡では大木8b式土器が多く見られるようになり、住居構造も楕円形プランのものが多くなる。

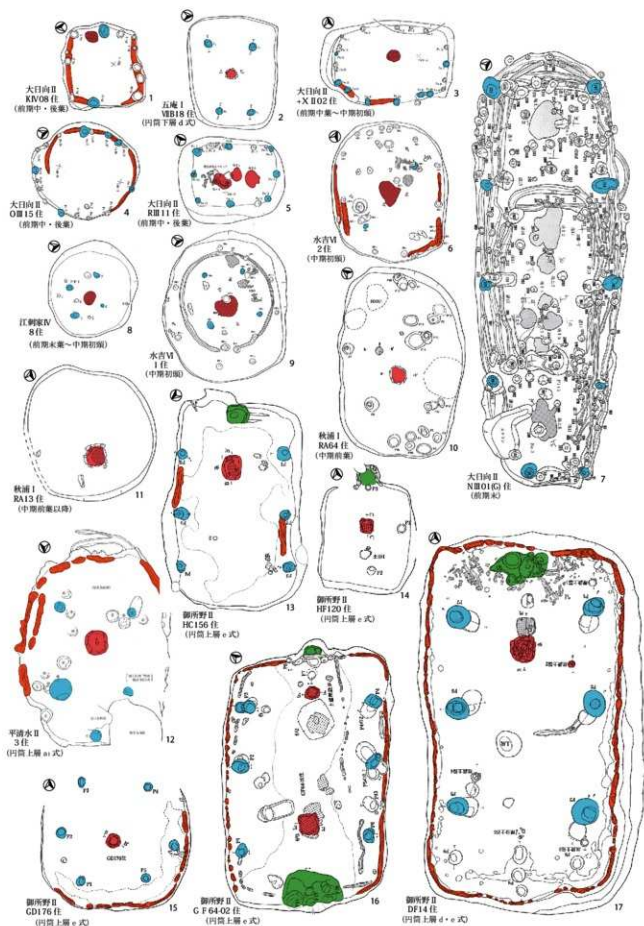


図 5-7 岩手県北部堅穴建物跡

	前期中葉	前期後葉	前期末葉		中期前葉			中期中葉		中期後葉		中期末葉
	円筒下層 b 式期	円筒下層 c 式期	円筒下層 d 式期		円筒上層 a 式期	円筒上層 b 式期	円筒上層 c 式期	円筒上層 d 式期	円筒上層 e 式期	櫻林式期 (大木各式期)	皇花式期 (大木9式期)	大木10式併行期
			d1	d2								
三内丸山												
北海道函館												
青森野田												
青森東部												
秋田県北部												
岩手県北部												

図5-8 各地域の時期別変遷(竪穴建物跡)

	前期中葉	前期後葉	前期末葉		中期前葉			中期中葉		中期後葉		中期末葉
	円筒下層 b 式期	円筒下層 c 式期	円筒下層 d 式期		円筒上層 a 式期	円筒上層 b 式期	円筒上層 c 式期	円筒上層 d 式期	円筒上層 e 式期	楕円式期 (大木 8b 式期)	扇花式期 (大木 9 式期)	大木 10 式併行期
三石丸止												
北海道函館												
青森県五戸												
青森県東目黒												
秋田県北畠												
岩手県北畠												

図 5-9 各地域の時期別変遷 (大型竪穴建物跡)

(6) まとめ

円筒土器文化圏の堅穴建物跡を、北海道南部（道南地域）、青森県西部（津軽地方）・青森県東部（南部地方）、秋田県北部、岩手県北部に分けて概観した。同じ文化圏であり、概ね運動した変化を辿るが、いくつかの傾向が指摘できる。

縄文時代前期では、平面形状が円形プラン・楕円形プラン・長方形プランがみられるのは各地域共通である。床面は、前期末葉から中期前葉にかけてテラス状の床面2段構造が盛行する。これは北海道南部に加え青森県全域、秋田県北部等の本州側でも見られるが、岩手県北部では希薄である。また、深さが1mを超える建物跡や床面が五角形の建物跡が北海道南部に多くみられることも特徴として挙げられよう。主柱穴は、各地域で2基や4基の主柱穴構造が確認されている。主柱穴がはっきりしないものや壁際に柱穴が巡るものがあるが、特に床面中央の炉の両側に2基の主柱穴が配されるものが、前期には定型的なものと言えよう。また外柱穴を有する建物跡が北海道南部には多く見られる。

縄文時代中期では、平面形状が円形や楕円形プランから卵形プランへの変遷がみられるが、中期中葉の青森県東部や岩手県北部では隅丸方形プランや長方形プランの建物跡が多いほか、中期後葉の北海道南部では楕円形プランの一端が鋭角状になり所謂「舟形」プランと呼ばれる形状のものが盛んに作られるなど、地域的な特徴も見られる。主柱穴は2～8基程度であり、外柱穴が青森県においても一部で確認されるが、検出段階では既に削平によって失われていた可能性もある。また建物内の壁際に特殊施設が設けられるものが中期中葉には一般的となり、中期後葉にも継続して見られる。「舟形」の建物跡の床面中央に「中央ビット」と呼ばれる土坑が北海道南部で見られるほか、岩手県北部や・秋田県北部は南に大木式土器文化圏を控えていることから、その影響が大木8b式以降に顕著となることも特徴である。

また大型堅穴建物跡については、前期、中期を通して北海道南部では細長い大型堅穴建物ほとんど見られず、幅広のタイプにほぼ限定される。

このように海峡を挟んで円筒土器文化圏の堅穴建物跡は、地域ごとの小異はあるものの概ね運動して推移した。大木式土器文化の波がこの地を洗い、独特の大木系土器を生み出したように、当地の人々はその居住施設にも独特の特徴を保持し続け、後期十腰内文化の母胎となりうる地域性を有したと言える。

(永嶋)

2 掘立柱建物跡

半地下式の床構造を有する「堅穴建物跡」に対し、床面を掘り下げない構造の建物を「掘立柱建物跡」と呼称する。それらの柱穴の多くは長方形あるいは正方形に配置され、建物跡短軸側に突出した棟持柱がある六角形（亀甲形）を呈するものもある。

研究初期には、長野県阿久遺跡の縄文時代前期の「方形柱穴列」で注目された掘立柱建物であるが、密に柱を並べるこのタイプは、地域的に広がりを持つものではない。阿久型「方形柱穴列」以後の掘立柱建物のルーツを東北地方縄文時代前期の大型堅穴建物に求める見解がある（石井 1998・阿部 2012）。東北地方の大型堅穴建物が、新潟県や関東地方へ波及し、それらが掘り込みを有さない「長方形柱穴列」に変化したものが、中期の掘立柱建物へ繋がったという見解である。

近年、富山県富山市の平岡遺跡において、縄文時代前期後葉の同心円状集落の墓域と堅穴建物帯に挟まれて、5棟の掘立柱建物跡が検出された。うち4棟は2間×1間構造で、柱穴径も概ね50cmを越す。縄文時代中期に盛行する柱穴の大きなタイプであり、北陸地方の一部では既に環状集落の一要素として縄文時代前期後葉段階に定着していたことがわかる。

ここでは、縄文時代中期を中心に集めた243棟のデータをもとに、円筒土器文化圏および大木式土器文化圏北半部の掘立柱建物跡の状況を辿る。なお、データ取得に際しては、各報告書の記述に拠ったが、梁桁や柱穴径などの計測値や建物の時期決定においては、報告書と異なったものもある。243棟のうち詳細時期がある程度明らかなのが185棟、残りの58棟は「中期」あるいは「縄文時代」との記述しか得られなかった。なお評価が分かれる池内遺跡例は上記の数には含めていない。

（1）縄文時代前期後半

明確にこの時期とされる掘立柱建物はほぼ見られないが、秋田県北部の大館市池内遺跡において、縄文時代前期後半（円筒下層式期）とされる63棟の掘立柱建物跡が報告されている。それらは、堅穴建物跡や土坑墓・フラスコ状土坑などとほとんど重複せず、排他的な占地を示しており、縄文時代の遺構である可能性は高い。しかしながら、東北地方で縄文時代前期段階のまとまった検出例は当遺跡に限られる。建物跡として復元できたものの中では、2間×1間のものが約半分を占めるが、一方で3間×1間と4間×1間で4割程度あって目を引く。柱穴の上端径は30cm以下が大部分であり、縄文時代中期の掘立柱建物跡と比べると小型が主体である。池内遺跡に続く類例の増加が待たれる。

三内丸山遺跡に近い、縄文時代前期の遺構群に隣接した青森市石江遺跡例は、前期中葉～後葉の可能性が指摘されている。また青森平野の最奥部の丘陵に位置する青森市新町野遺跡でも、縄文時代前期の可能性のある柱穴が検出されているが、建物としてのまとまりを示すものではない。

（2）縄文時代中期

① 中期前葉

中期前葉とされるものは5棟であり、全体の3%以下に止まり、岩手県盛岡市周辺に限定される。盛岡市上平遺跡例は中期初頭とされる2間×1間の建物跡が2棟検出されている。ともに中央に現地性の焼土が確認されており、平地式建物の地床炉の可能性が高い。雫石町小日谷地IB遺跡例は、中期初頭～前葉とされる1間×1間の例であるが、堅穴建物跡には中期後葉のものが多く、調査の広が

りを待ちたい。

② 中期前葉・中期中葉

中期中葉・中期中葉とされるものは、29棟のうち半分の14棟が三内丸山遺跡周辺に集中する。青森市近野遺跡、三内丸山(6)遺跡、三内丸山(9)遺跡となり、大部分の12棟が2間×1間の構造である。三内丸山遺跡で縄文時代中期中葉・後葉とされた建物跡もこの段階のものが含まれている可能性が高く、この時期に2間×1間構造の掘立柱建物が青森平野において普及したことがわかる。近野遺跡例は、台地上の中央広場を向いて放射状に、数棟の2間×1間の掘立柱建物跡がみられる(図5-12)。下北半島の付け根にあたる青森県六ヶ所村富ノ沢(2)遺跡例は、円筒上層式期の所謂列状集落を構成する遺跡であるが、列状の墓域に並行した建物跡が9棟あり、9棟中7棟が2間×1間の建物跡である(図5-13)。弘前市独狐七面山遺跡や三戸町泉山遺跡など青森県各地に、この時期の建物跡の分布が確認される。

③ 中期後葉

中期後葉は82棟と最多であり、前後の時期にまたがるものを含めると109棟となり、全体の約6割を占める。そのうち7割が岩手県紫波町西田遺跡と秋田県能代市鳥野遺跡にある。

西田遺跡は大木8a~8b式期の同心円状集落であり、土坑墓群や竪穴建物群と共に集落の一要素として掘立柱建物群が環状に巡る。西田遺跡では多様な柱穴配置が見られ、2間×1間+両棟持柱構造(23棟43%)を主体に、1間×1間+両棟持柱(12棟22%)、2間×1間(10棟19%)、1間×1間(8棟15%)の建物跡が見られる。棟持柱がある建物跡は、多く平側が広場中央方向を向くものが多いが、妻側が中央に向く例も数棟認められる(図5-14)。2間×1間+両棟持柱構造は帯状構造の全体に見られる一方、2間×1間のものは北側と南側に、1間×1間は北側に、1間×1間+両棟持柱のものは南側に集中する傾向がある。

鳥野遺跡では、この時期を中心とした掘立柱建物群が検出されており、29棟全てが2間×1間のものである。うち中期後葉とされる2棟は柱穴の上端径が1mを超える大型の例である。また全体に鳥野遺跡例は、桁行が梁行の2倍以上となるものが多く、やや細長い印象をうける。

青森平野では前述のように、いち早く中期中葉に2間×1間の建物跡の普及が認められる。拠点集落である三内丸山遺跡では100棟以上に復元可能な柱穴が検出されており、その中で建物として組み込まれたもののみ報告されている。遺跡の東と南から続く道路は、脇に土坑墓や環状配石墓を見ながら、台地北部に到るとそこには掘立柱建物が数棟並び、あたかも集落中心域への入り口施設のような景観を呈していたのであろう。

更に台地北端部には、幾度かの建て替えを経て、最終段階には最大直径2mの柱穴からなる大型掘立柱建物跡が数棟確認されている。集落の重要な要素を占めた遺構である。

三内丸山遺跡では、大型もそれ以外の掘立柱建物跡も2×1間の長方形構造のものが主体となる。柱穴の上端径が1mを超す建物跡も多数あり、周辺遺跡でも柱穴の上端径が70cmを超えるものが目立つ。八戸市松ヶ崎遺跡でも8棟の掘立柱建物跡が検出されている。調査面積が狭く、全体が把握できるものが少ない中で、1間×1間と2間×1間の建物跡が認められる。

他に、内陸部の岩手県宮古市袋帯遺跡においても大木9式期とされる2間×1間の建物跡が見つかり、この時期には北三陸地方の大木式土器文化圏にも掘立柱建物が分布している。

④ 中期末葉

中期末葉とされたものは34棟と全体の2割程度を占め、前段階より減少する。この時期も2間×1間のものが4割を超えるが、一方、三陸沿岸南部の大船渡市長谷堂貝塚では1間×1間の例が非常に多い。

秋田県大仙市太田遺跡、秋田市松木台Ⅲ遺跡、烏野遺跡、岩手県一戸町御所野遺跡、宮古市崎山貝塚、青森県三沢市猫又(2)遺跡、西目屋村水上(2)遺跡など各地の遺跡にこの段階の掘立柱建物跡が見られる。一方で、八戸市田代遺跡など竪穴建物跡は多いものの、掘立柱建物跡がみつからない遺跡もある。

三内丸山遺跡の中期中葉～末葉など幅をもって報告された遺構にも、この時期のものが含まれる可能性が高い。また青森県鯉ヶ沢町東禿遺跡では、三内丸山遺跡同様の大型掘立柱建物跡が2棟検出されている。そのうち1棟は台地の縁辺に構築されており、三内丸山遺跡例と同様の立地を示す。

岩手県北部の馬淵川本流に臨む御所野遺跡は、中期中葉には円筒土器文化の拠点集落であった。その後、中期後葉の大木式土器文化の受容により、環状構造を意識した集落が作られ、広場の削平、墓域・配石・盛土形成がなされた。それによって建てられた掘立柱建物跡11棟が中央広場の墓域と配石遺構の外側に見ついている。2間×1間を主体とし、ほとんどが大木10式期のものである。集落の存続期間から考えると、御所野遺跡における掘立柱建物の登場は比較的遅い段階であるといえる。

秋田県中央部の松木台Ⅲ遺跡と秋田県南部の太田遺跡例は、地床炉2基がある特徴的な構造を示す。松木台Ⅲ遺跡は大木8式から10式まで続く集落遺跡であるが、大木9式新段階になって掘立柱建物が出現する。その後、大木10式古段階には竪穴建物と併存するが、大木10式新段階には竪穴建物は残るものの掘立柱建物は消滅する。20棟のうち2間×1間のもの8棟があり、うち4棟に地床炉が伴う。2間×1間+両棟持柱のもの1棟にも地床炉が伴う。同様に、太田遺跡例は7棟中6棟が2間×1間+両棟持柱のもので、そのうち5棟が2か所に地床炉があり、使用頻度が高いものは両者が繋がるように見えるほどである(図5-11)。2間×1間(+両棟持柱)の建物に地床炉が認められるのは、中期末のこの地域に顕著で、梁行2m台で柱穴の上端径が40cm以下の比較的小型のものが多い。

(3) まとめ

大木式土器文化圏北部と円筒土器文化圏においては、明確に縄文時代前期とされる掘立柱建物跡はほぼ見られず、縄文時代中期前葉のものも非常に類例が少なく、その様相は不明である。

明確に時期比定されているものは、縄文時代中期中葉の青森平野の三内丸山遺跡周辺に集中し、一部秋田県北部の烏野遺跡においてもみられる。この地域でも前段階の類例に乏しく、突然に中期中葉(円筒上層d式ないしe式期)に広がる。しかも2間×1間の柱穴配置も斉一性が高い。三内丸山遺跡で集落が最大化を示すこの時期に、外部からの何らかの影響があった可能性は考慮されてよい。

報告で100棟以上とされる三内丸山遺跡でも、縄文時代前期および中期前葉の時期に帰属する掘立柱建物跡が皆無なことは、中期中葉における急増を示唆している。この地域の縄文時代中期前葉段階の集落例が乏しいことから詳細な様相は不明であるが、中期前葉の集落遺跡である青森県蓬田村山田(2)遺跡や八戸市笹ノ沢(3)遺跡においても掘立柱建物跡は確認されていない。

縄文時代中期後葉の三内丸山遺跡では、大型を含む掘立柱建物の建築が継続して認められる。大木

式土器文化圏では大木8式期に西田遺跡の同心円状集落で掘立柱建物跡が数多く見られ、2間×1間+両棟持柱建物が盛行する一方、1間×1間、1間×1間+両棟持柱、2間×1間のもも一定数を占めている。時間幅があるとは言え、一集落内での掘立柱建物のあり方は多様である。この2間×1間+両棟持柱タイプは次段階の中期末葉に奥羽山脈を西に越えた太田遺跡で多く見られる。それらは平地構造の床面に2基の地床炉を有するもので、現段階ではこの地域（秋田県南地域）に特徴的な形態と言えよう。一方で他地域の掘立柱建物跡にも地床炉が付帯していた可能性を提起するものである。

縄文時代中期末葉の御所野遺跡や崎山貝塚は、大木式土器文化圏の環状を意識した拠点集落であるが、共に大木10式期に2間×1間の掘立柱建物が見られ、それらには梁行寸法が2m台の小型のものが多く、中期後葉の西田遺跡や遠野市新田Ⅱ遺跡、中期末葉の御所野遺跡では、掘立柱建物が大木式土器文化圏の環状集落の構成要素となっている。

大木式土器文化圏北部と円筒土器文化圏の縄文時代中期を中心とした掘立柱建物跡を概観したが、2間×1間を中心とする建物跡の分布上の広がり、まず青森平野西部の三内丸山遺跡周辺において縄文時代中期中葉段階に見られ、青森県域においては中期末葉まで続く。

一方、大木式土器文化圏北部では中期前葉の建物跡は数例みられるものの、類例が少なくまた時期比定に再検討が必要な例もある。明確に中期中葉の大木7式段階とされるものは北部にはみられず、大木8式段階の西田遺跡や新田Ⅱ遺跡の環状集落でみられるようになる。裳帯遺跡などで大木9式の建物跡が見つかっており、中期後葉の北三陸地方内陸部でも既に受容が認められる。秋田県域でも北部の鳥野遺跡例は中期中葉から末葉であり、古いものも存在する可能性がある。また中期後葉・末葉の地床炉を有する松木台Ⅲ遺跡と太田遺跡例が目を引く。

円筒土器文化圏の掘立柱建物跡は、まず中期中葉段階の青森平野の三内丸山遺跡周辺に濃密な分布が確認された。冒頭で記したように、北陸地方では前期後葉には既に掘立柱建物が出現、定着しており、ヒスイがもたらされた日本海ルートによる北陸地域からの青森平野への掘立柱建物の到達の可能性も考慮に入れない。

縄文時代後期になると、東北地方北部では青森県を中心に、環状掘立柱建物群が前葉と後葉に盛行する。後期には中期に盛行した2間×1間タイプは激減し、秋田県北部域の環状列石の周囲に見られる1間×1間および1間×1間+両棟持柱の所謂亀甲形のものが主体となる。その機能も異なると考えられ、縄文時代中期段階では堅穴建物と併存するものが多いことから、居住施設以外の機能が主と考えられる。一方、縄文時代後期の青森県域には堅穴建物と併存するもののほかに、掘立柱建物と土坑のみで構成される環状構成の遺構群が見られ、これらは生活遺物を多く出土する遺跡であることから、居住が主たる機能の施設であったと考えられる。

縄文時代中期から後期にかけて、円筒土器文化から大木系土器文化を経て、十腰内文化へと到る過程で、西田遺跡に見られる円環構造と1間×1間および1間×1間+両棟持柱といった要素が、青森県域にももたらされ、新たな集落形態を纏うこととなった。ただし、最花式・大木10式併行期の円環を示す可能性のある構造は青森県域の集落では富ノ沢(2)遺跡を除けば他に見られず、検討が必要である。

今後は、北陸地方および大木式土器文化圏南半の掘立柱建物跡を把握することによって、円筒土器文化圏の掘立柱建物を再考する必要がある。(永嶋)

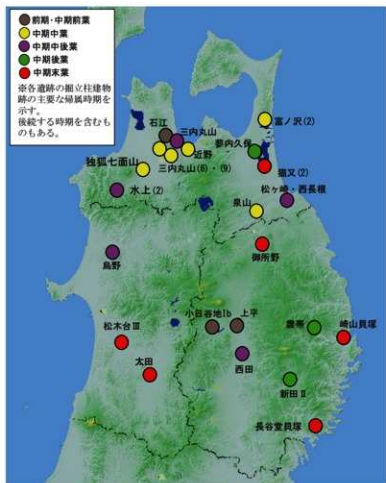


図 5-10 円筒土器文化圏と大木文化圏北半の主な掘立柱建物検出遺跡

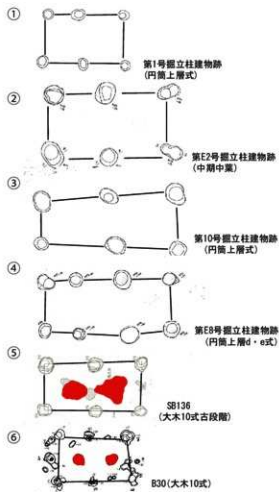


図 5-11 各地の掘立柱建物跡

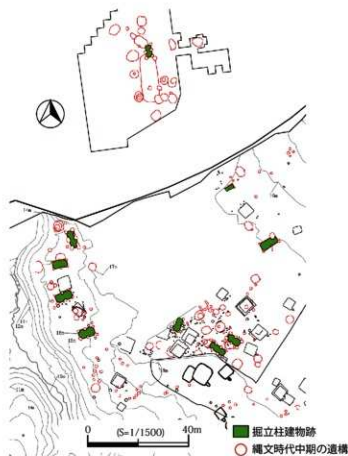


図 5-12 近野遺跡遺構配置(中期中葉)

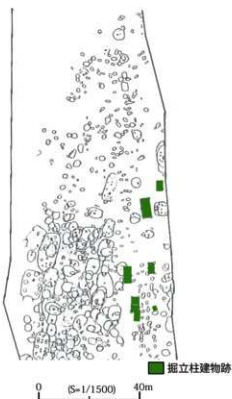


図 5-13 富ノ沢(2)遺跡遺構配置(中期中葉)

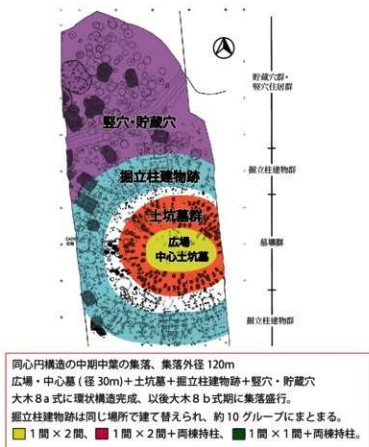
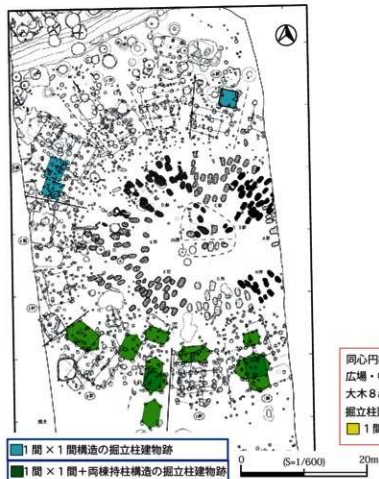
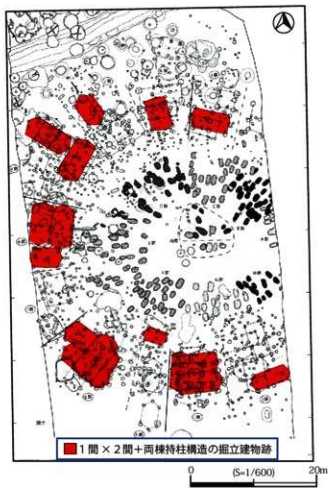
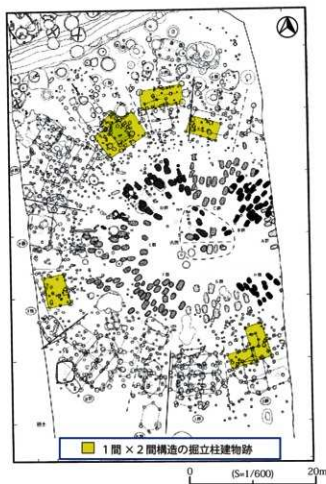


図 5-14 岩手県紫波町西田遺跡の多様な掘立柱建物跡 (小林2012を改変)

第2項 土坑

1 貯蔵穴(註1)

円筒土器文化成立後の(註2)、主に集落内の貯蔵穴(フラスコ・袋状土坑)配置、消長、規模について地域別、時期別に概観し、本遺跡と比較する。

(1) 集落内の貯蔵穴配置(図5-15)

① 縄文時代前期

前期中葉以降には円筒土器文化圏内での広範な分布が顕著になる。渡島半島南東部、函館市八木A遺跡(前期中葉)、同市ハマナス野遺跡(前期後葉)の海岸段丘斜面においては群状、渡島半島の津軽海峡に面した海岸段丘に位置する木古内町釜谷遺跡においては緩やかな稜線に沿って列状(円筒下層d₁式期)、木古内町大平遺跡(円筒下層d₁式期)においては群状に貯蔵穴が堅穴建物跡群に対応して配置される。本州日本海側の段丘縁辺または尾根稜線においては青森市石江遺跡(円筒下層d₁式期)、蓬田村山田(2)遺跡(円筒下層d₁・d₂式期)、大館市池内遺跡(前期後葉)(註3)等の列状、つがる市牛潟(1)遺跡(前期後葉)、北秋田市二重島C遺跡(円筒下層d式期)の群状配置がみられる。対して、本州太平洋側の段丘縁辺・斜面部においては、八戸市畑内遺跡(円筒下層c・d₁式期)、軽米町大日向Ⅱ遺跡(円筒下層a~d₂期)等の堅穴建物跡に隣接ないしは近接する群状のほか、七戸町矢倉(1)遺跡(円筒下層c・d式期)にみられる貯蔵穴単独の群状といった配置形態が認められる。

② 縄文時代中期

中期も引き続き貯蔵穴がみられる。渡島半島の津軽海峡に面した函館市石川Ⅰ遺跡(中期中葉)、函館市桔梗Ⅱ遺跡(サイベツⅦ式期)の海岸段丘縁辺及び緩斜面においては、堅穴建物跡の近辺に散漫ながらも一定の間隔に配置されるほか、渡島半島噴火湾沿岸、八雲町栄浜Ⅰ遺跡(中期後半)の河岸段丘縁辺部においては堅穴建物跡に囲まれるように密集して配置される。本州日本海側、山田(2)遺跡(円筒上層a式期)においては、前期から継続して列状、青森市三内丸山(6)遺跡(円筒上層e式期)、能代市館下Ⅰ遺跡(中期中葉)においては、段丘縁辺または斜面上に堅穴建物跡と隣接した群状配置がみられる。本州太平洋側においても同様の配置形態がみられ、八戸市笹ノ沢(3)遺跡(円筒上層a式期)、六ヶ所村富ノ沢(2)遺跡(円筒上層d・e式期)の列状、一戸町田中遺跡(中期中葉)の群状配置が挙げられる。

円筒土器文化圏においては、尾根稜線・段丘縁辺に沿って列状、または粗密はあるものの群状に貯蔵穴が配置される。前者は前期後葉~中期前葉の日本海側に類例が多く、後者は各期各地で確認され、文化圏内で地域性を見せつつも多様なあり方を示す。

(2) 貯蔵穴の盛期と規模(図5-16)

貯蔵穴の検出例は、縄文時代前期後葉と中期中葉に集中する。ただし、中期中葉においては、拠点的な集落またはその周辺に限られる。一方、貯蔵穴の規模は、前期は津軽海峡~本州太平洋側において2m超が中心となっており、地域性がみられる。中期中葉になると、日本海側においても2mを超えるが、小型のものとの両極化が顕著になる。この事象は中期後葉以降に小型の貯蔵穴が主体となる

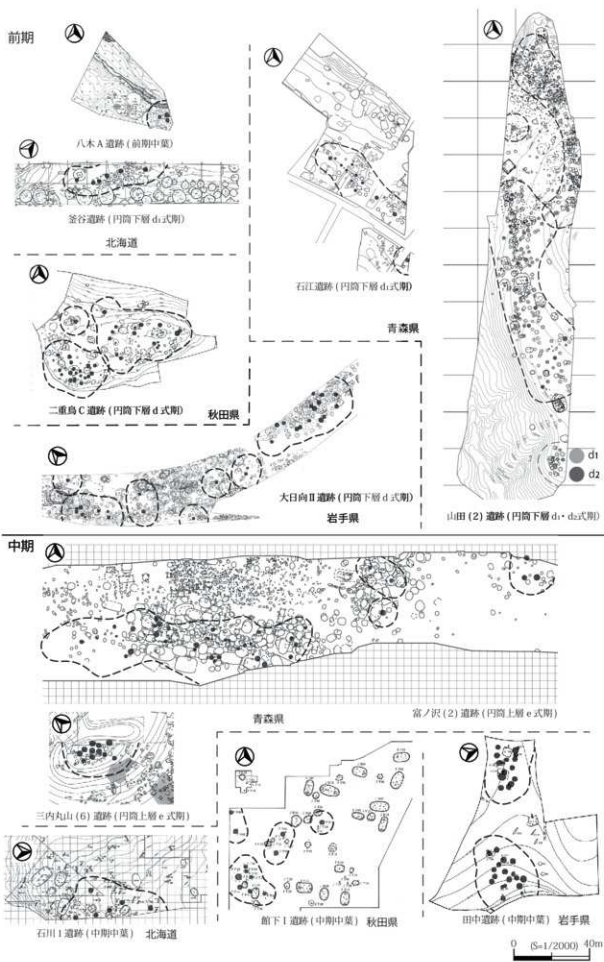


図 5-15 集落内の貯蔵穴配置

流れと関連するものと考えられる。

(3) 三内丸山遺跡における貯蔵穴

三内丸山遺跡において貯蔵穴（フラスコ状・袋状土坑）は、居住域が展開する段丘の縁辺に群状に配置されるほか、縄文時代前期の旧野球場地区では堅穴建物跡の近傍に構築され、居住域と区別されつつも一定の関係性がある。期中中葉から後葉には、旧野球場地区において底面壁際に小坑を有する断面逆台形ないしは箱形の貯蔵穴が尾根縁辺に沿って分布しており、列状の要素も看取される。時期別には、盛土下等に存在する可能性がある前期を除くと、円筒上層e式期、最花式期に比定される大型・小型の貯蔵穴が多く、堅穴建物跡数と調和的な傾向を示す。

円筒土器文化圏における貯蔵穴の配置や消長には集落動態と密接な関連性がみられ、文化圏の成立期から不可欠な集落の構成要素であったと考えられる。そのなかで三内丸山遺跡は円筒土器文化圏の諸遺跡にみられる貯蔵穴の諸傾向を長期間に渡って示す遺跡として特徴的である。

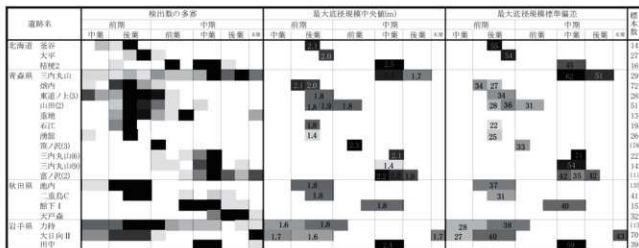


図 5-16 貯蔵穴数と規模の変遷

2 その他の土坑 (図 5-17・表 1)

本遺跡で報告された堅穴遺構のうち、粘土採掘坑かと考えられるものを除いた縄文時代期中中葉から後葉を主体とする大型の堅穴遺構が南地区北側、北地区南側斜面において検出されている。その特徴として深い掘り込み、堅穴建物跡に近い平面形と規模が挙げられるほか、テラス状施設、ピット、焼土なども確認されている。

円筒土器文化圏においては、縄文時代前期中葉から後葉、そして中期後葉に堅穴遺構の事例がある。前期には、ハマナス野遺跡、八戸市重地遺跡、大日向 II 遺跡において長軸 2~3m の円形~方形基調の平面形を呈し、長軸に 2 本、または四隅に柱穴を設けた堅穴遺構が報告されている。集落内では列状や群状に、または分散して配置されるほか、人為堆積、覆土中の柱穴等の掘り込み、複数の遺物廃棄面、焼土層・焼土面、礫の配置等が確認されている。また、八戸市松ヶ崎遺跡では底面中央にピットと十字型の溝が設けられた堅穴遺構も存在する。こうした特徴から、非居住の施設としての用途が想定されている。

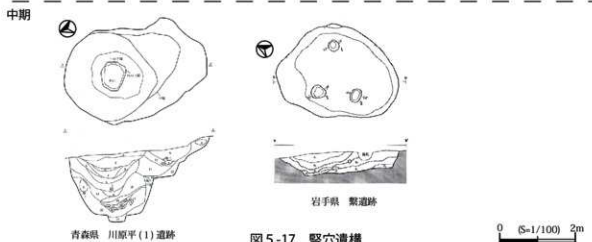
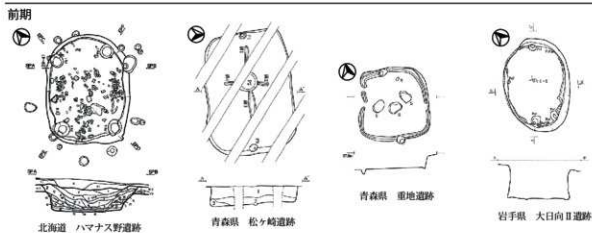
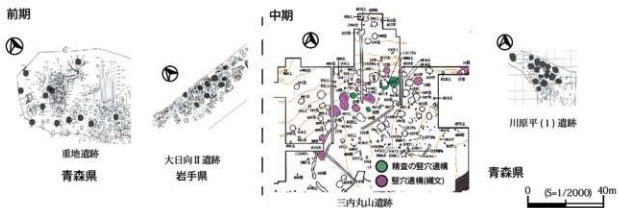


図 5-17 竪穴遺構

遺跡名	時期	数	平面形	平面規模(m)	備考
北海道 ハマナス野	円筒下層b～d式	10	楕円形・不整形円形・楕円形・円形?	2.6-3.34*1.08-2.56	L1P-13・16・18柱穴2*2本、L1P-14・17柱穴2本、L1P-15柱穴3本、複数の遺物埋蔵層を持つ。
青森県 三内丸山	円筒上層e式、層林式	16	円形	2.4-5.25*2.05-4.35	4基精製、14型柱穴4個、20型柱穴17個、21型柱穴1個、32型; 意匠中央棟上
酒町野	前期末葉	3	円形・不整形円形・楕円形	2.06*1.94, 3.55*3.46,	1型ビット1基、2型ビット1基、4型一部埋蔵
山田G	円筒下層以降、中期、縄文	3	円形・楕円形	3.1-4.2*2.82-3.4	3型・5型ビット2基、4型遺構
川原平(1)	中期後葉、中期後半	16	円形・楕円形を基調	2.55-4.06*1.84*3.37	3型、4型、5型、人骨埋蔵
重地	円筒下層a式	14	方形主体、円形・長方形	1.58-2.28*1.13-2.05	長軸上に2個一対の柱穴配置
松ヶ崎	前期後葉以降、最末式	2	長方形・不整形円形	3.2*2.3, 2.70*2.45	2号型穴遺構ビット3基、十字型の溝、第1号型穴遺構ビット10個、コハク砂片、鯉骨、鯉骨、魚目
岩手県 大日向II	前期中葉～後葉	15	楕円形・長方形	1.84-2.96*1.48-2.55	長軸両端に柱状状のビット
繁	大木3b～9式	4	不整形円形・不整形円形・楕円形	2.37-3.27*1.87*3.0	R217柱穴4基、R1218柱穴3基、ヒスイ製重飾品、R219柱穴5基、R220柱穴1基
且名市II	前期以降、中期末葉以降	2	方形・楕円形	5.0*3.3, 2.75*2.2	R201柱穴1基、右側の状の痕跡
東舟越	大木6式?	1	円形か	3.0*1.65	床面平坦、北壁面に炭化物
雲南	大木4式以降、前期末以前	2	六角形状・円形?	2.9*2.5, 5.9*3	T47型穴遺構柱穴6基、R1に炭化物を含む黒色の土が0.46型穴遺構柱穴1基

表 1 竪穴遺構一覧

縄文時代中期については、堅穴遺構のまとまった検出例は限られるが、配置や堆積状況等が前期と相似する事例が知られる。西目屋村川原平(1)遺跡では、中期後半に台地の突端部に長軸が約2～4m、断面逆台形の大型土坑が列状に配置される。張り出し部分、焼土層が認められるものもあり、貯蔵穴としての用途が想定されている。盛岡市繫遺跡では中期後葉の長軸2～3m、平面不整形の堅穴遺構が近接して4基構築されており、覆土は人為堆積を呈するほか、最下層からヒスイ製品が出土したものがあり、墓壙もしくは祭祀関連遺構と推定されている。

本遺跡における堅穴遺構は、川原平(1)遺跡例に近いものもあるが、テラス状の張り出しが全周する堅穴遺構の類例は管見する限り不明である。配置や集落の変遷に着目するのであれば、居住域が拡大する時期に多様な形態、堆積状況を示す堅穴遺構が南の谷に面した一定の空間で構築されていることが本遺跡における堅穴遺構の特徴といえる。その性格については、多様な用途を想定し、検討を進める必要がある。(業天)

- (註1) 一般に堅果類が貯蔵対象に想定されるフラスコ・袋状土坑ではあるが、なかでもクリは重要な対象である。秋田県横手市梨ノ木塚遺跡では、縄文時代晩期のフラスコ状土坑内から厚さ10cm以上のクリ堆積層が確認されている(秋田県教育委員会1979)。北海道内では早期から前期中葉まではクリの利用痕跡が認められず、本州側との共通した土器文化圏が成立する前期中葉(円筒下層c・d式)から後期にかけ子葉や堅果皮、そして材の分布が渡島半島から石狩低地帯まで拡大する。その背景には食料や用材としての有用性を認めた人間集団の管理・栽培があったことが想定されている(山田2001)。
- (註2) 渡島半島側では既に縄文時代早期の田戸上層式から三戸式併行の貝殻文土器段階に、函館市中野B遺跡や旧南茅部町豊原O遺跡でフラスコ・袋状土坑が見つかった。豊原O遺跡では大型土坑P-17底面に「華貴状圧痕」が検出され、穀物を敷いた貯蔵空間があったと推定された(西脇対名氏氏教示 函館市教育委員会ほか2009)。
- (註3) 円筒下層式土器は日本海側を大きく南下し、石川県真脇遺跡にまで伸びて分布する。日本海側の半島や島嶼伝いに土器が広がったと考えられるが、海上交通上の大きな目標である烏海山の南麓、山形県吹浦遺跡では1950年代の調査当初、洞窟遺跡と誤認された大型の貯蔵穴が見つかった。近年ではそれが円筒土器文化の影響のもとたられた貯蔵穴と評価されている(小林2014)。

第3項 墓

1 三内丸山遺跡における墓に関する各遺構について

(1) 土坑墓 (図5-18~20)

第2章第3節第1項では、主に楕円形の土坑を土坑墓として検討対象とした。その記載のとおり、土坑墓列は4か所から検出された。特に遺跡北地区の〈土坑墓①-1〉は長さ420m、遺跡南地区の〈土坑墓②〉は長さ280mと、長大な列をなしている。前者は遺跡北地区の台地のもっとも高い部分、後者は遺跡北地区から南地区にかけての低位段丘から中段段丘の上がり際と、地形の変換点から道路跡とともに検出されている。〈土坑墓①-1〉は旧野球場予定地の調査や第4・7・8次調査として確認された。その南北にあたる第2・3・28次調査区では確認されていないため、分布範囲はおおよそ限定してとらえることができる。全体では300基ほどで構成されるものとみられる。〈土坑墓②〉では道路跡の範囲はおおむね判明したが、土坑墓については分布の粗密が大きい。第14・17・20・23次調査などでの190基以外にも、青森市教育委員会の調査ではさらに標高の高い部分から並列して検出され、その分布範囲や数の想定にはさらに検討の余地が残されている。〈土坑墓③〉・〈土坑墓④〉についても、分布範囲は確定していない。〈土坑墓③〉の南北は土取りされた崖に挟まれ、分布範囲の確認に自ずと限界がある。また、〈土坑墓④〉は運動公園造成の際の整地により旧地形が見えにくく、確認作業を行うとしても困難が予想される。

土坑墓列のおおまかな時期は、出土遺物から〈土坑墓①〉が縄文時代前期末葉から中期中葉、〈土坑墓②〉が縄文時代中期前葉から中期後葉、〈土坑墓③〉が縄文時代中期前半、〈土坑墓④〉が縄文時代中期後葉を中心とし、南地区が時期的により新しい。なお、〈土坑墓②〉では中期末葉とされる土坑墓があるが、重複がきわめて著しく、楕円形の土坑墓であるか判断が難しい。それぞれの土坑墓列は時期が一部重複すると考えられ、同時期に複数の墓域が形成された可能性があるが、相互の関係性についてはさらに検討する必要がある。なお、南盛土の下から検出された楕円形の土坑は、集落の開始期にあたる前期中葉期の土坑墓の可能性があり、当該期の墓域はその周辺につくられた可能性がある。

以上の他にも〈土坑墓①-1〉の周辺では、石

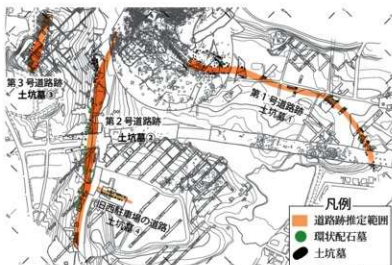


図5-18 土坑墓列と道路跡

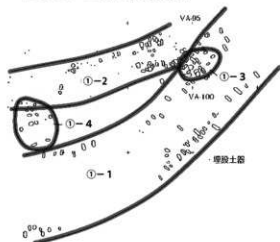


図5-19 旧野球場建設予定地で検出された土坑墓列

製装身具が出土した円形の土坑が数基検出された。最花式期のもので、〈土坑墓①-1〉よりは新しい。

中期末葉に位置づけられる埋葬施設は、上記の〈土坑墓②〉にその可能性があるものが含まれ、そのほかには北地区の北西にあたる第1次調査の第762号土坑に可能性があり、大木10式併行期の埋設土器が少数みつまっているが不明な点が多い。

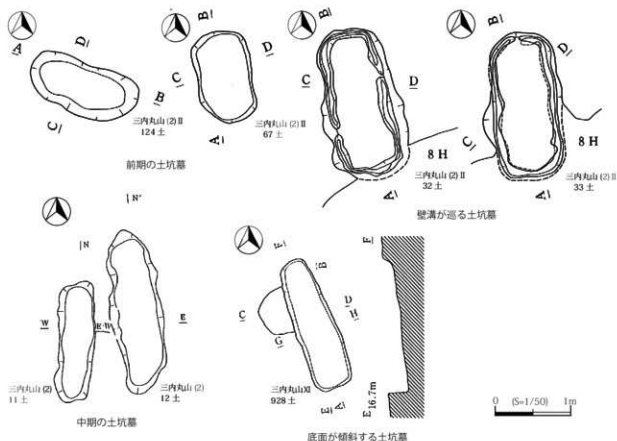


図5-20 三内丸山遺跡の土坑墓

(2) 環状配石墓(註1) (図5-18・19)

分布は土坑墓と重複し、環状配石墓(第2章第3節第2項)では〈土坑墓①〉で5基、〈土坑墓②〉で24基、〈土坑墓③〉で1基、〈土坑墓④〉で4基として記載した(〈土坑墓①-1〉の5基のうち4基、〈土坑墓④〉の4基は第2章第3節第1項でも取り上げ、基数が重複している)。

時期を示す遺物は出土していないが、第2章第3節第2項で示したとおり、各土坑墓列に近い時期が想定される。

〈土坑墓②〉に属する環状配石墓出土炭化材の年代測定の結果、縄文時代中期中葉～後葉に相当する測定値が得られている。また、〈土坑墓②〉の列北側では円筒上層b式期の土坑墓が確認されている。そして、土坑墓と環状配石墓が重複する場合、配石の下から土坑墓が確認される。以上から、〈土坑墓②〉では土坑墓に加え環状配石墓がつくられたものとみられる。

土坑墓列ごとの環状配石墓では相違点と共通点がある。相異点としては配石の形状がある。〈土坑墓①〉や〈土坑墓④〉では配石の径が小さく、半周程度するものがほとんどであるが、〈土坑墓②〉では埋葬部を大きく取り囲み全周するように配置される。ただし、配置に関しては〈土坑墓①〉や〈

土坑墓④>は地表面から遺構確認面までが浅く、<土坑墓①>では調査前は畑として耕作されており、原位置を留めず除去された可能性がある。

また、配石の規模にも違いがある。<土坑墓①>や<土坑墓④>では土坑墓の掘方を一回り大きくした程度の弧となるものが多く、土坑墓の一部ないし半周程度に礫が並ぶものがある。<土坑墓①>の列東端付近で確認された第952号土坑は長軸両側に礫が配置され、<土坑墓①>の中でも多数の礫で構成されるが、直径は2mほどである。それに対し土坑墓②>では径3.5～4mほどで、埋葬部よりはるかに大きく礫が巡る。<土坑墓②>では礫がまばらな部分もあるが、それでも全周が意識されているものとみられる。なお、環状配石墓の配石方法については『三内丸山遺跡22』において詳細な検討がなされており、参照されたい。

共通する点としては、礫の配置方法がある。礫は<土坑墓②>では比較的大きなものが用いられる傾向があり、その中には環状配石墓の円弧に沿って二重と直交で規則的に礫を配置したものがある。<土坑墓①・土坑墓④>の中にも、円形と細長い礫を交互に並べたもの（<土坑墓①>の第952号土坑の配石）、<土坑墓②>と同様に縦・横に二重に配置したもの（<土坑墓②>の第1号配石）がある。<土坑墓①・土坑墓④>は検出数そのものが少ないものの、礫の配置に共通する意識があったものと考えられる。

各土坑墓列に分布する環状配石墓について、<土坑墓①>の環状配石墓は中期中葉期まで、<土坑墓②>では中期後葉期を中心とした時間差ととらえることができ、<土坑墓①>での規模の小さな少数の配石墓から<土坑墓②>の大規模な環状配石墓の盛行への変化で理解することが可能である。しかし、<土坑墓②>と<土坑墓④>では、大まかには時期の違いはとらえにくい。重複する時期があるとすれば、配石方法の違いをどのように理解できるか、検討が必要である。

また、環状配石墓と土坑墓との関係では、両者の分布域や構築時期は重なり密接に関連する。環状配石墓の埋葬部と土坑墓との構造や出土遺物などについては共通し、明確な違いは配石の有無のみといえる。いずれの土坑墓列についても、土坑墓と環状配石墓は併存していたものと考えられる。しかし、数量としては土坑墓の数は環状配石墓に対し圧倒的に多く、そのために環状配石墓の存在が際立つ。

(3) 埋設土器

第2章第3節第3項のとおり、特に数多く分布するのは北地区の北盛土内及びその周辺で、その数は500基にもほなる。ほかに南盛土や西盛土で確認され、特に後者では密集して検出された部分がある。北の谷の東側の墓域である<土坑墓①-2~4>では、土坑墓列に混在するように埋設土器が57基検出された。ここへの構築にあたっては、盛土周辺とは異なる理由、しかも<土坑墓①>の中でも<土坑墓①-2~4>に集中する理由があったと思われるが、判断としない。

埋設方法は正立が圧倒的に多い。ごく少数であるが、2個体を合わせ口や入れ子の状態で埋設したものがある。合わせ口は4基中3基、入れ子は4基中2基が円筒下層式期のもので、正立での埋設が一般的でありながら、縄文時代前期のほうが多様な埋設方法が認められる。

円筒下層式土器と判断されるものでは約2割から、礫や敲磨器類、剥片などの遺物が出土した。また、円筒上層式と判断されるものでは4割強から遺物が出土する。円筒上層式期では敲磨器類や礫の出土が多く、遺物が出土した埋設土器の半数以上がこれらで占められる。

(4) その他の葬送関連遺構

第7鉄塔地区では、フラスコ状土坑がまとまって検出されており、そのうちの1基の底面からは、入れ子の状態で小型の円筒上層a式土器2個体と石皿が出土した。一般に貯蔵穴と考えられるフラスコ状土坑にあって、特殊な出土状態であることから、墓に転用された可能性がある。

土坑墓などの遺構に伴うものではないが、北の谷から人骨がみつまっている。この評価は難しいが、埋葬施設を設けない葬法の可能性もある。

2 他遺跡の類例

(1) 土坑墓 (図5-21)

本遺跡での土坑墓は、縄文時代前期末葉以降、道路に沿って列状に並ぶ特徴がある。円筒土器文化圏の他遺跡での土坑墓のあり方を、青森県内を中心に概観する。

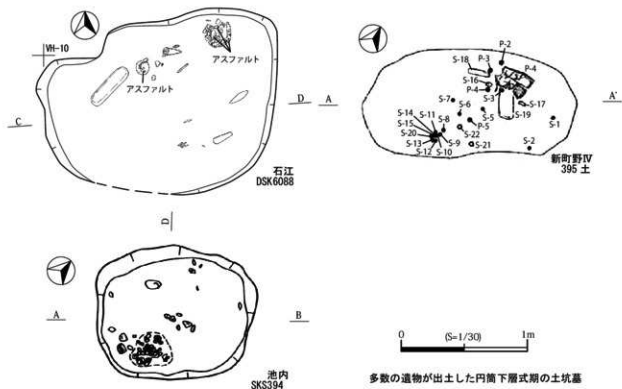
土坑墓が検出された例として、円筒土器文化の開始期にあたる縄文時代前期中葉の平川市大面(1)遺跡、八戸市畑内遺跡、北海道函館市八木A遺跡、前期後葉～末葉の青森市石江遺跡・新町野遺跡・稲山(1)遺跡、北海道木古内町釜谷遺跡、秋田県大館市池内遺跡、前期末～中期初頭のつがる市牛潟(2)遺跡、南部町苫米地館野遺跡、中期初頭の八戸市笹ノ沢(3)遺跡、前期末～中期前半の蓬田村山田(2)遺跡、中期中葉～後葉を中心とした六ヶ所村富ノ沢(2)遺跡、野辺地町榎ノ木(1)遺跡、時期が不明確であるが七戸町二ツ森貝塚などがある。

前期中葉の平川市大面(1)遺跡、八戸市畑内遺跡の集落では土坑墓は居住域の近くからみつまっている。大面(1)遺跡では、居住域の近くで土坑墓や埋設土器が、そこからやや離れた区域でも土坑墓や配石墓が検出された。畑内遺跡では円形に近い土坑墓があり、中には整溝を部分的に巡らせるものもある。土坑墓から石剣類が3点出土したものや、土器2個体が出土したものなどがある。八木A遺跡では、主軸が南-北あるいは北東-南西の土坑墓が20基以上検出された。中には人骨が確認されたものもあり、遺物では円筒下層a式土器や石鏃、敲磨器類が出土したものがある。

前期後葉以降までには円筒土器文化圏において堅穴建物が長軸を揃えてつくられるなど、直線状の配置の集落が現れるようになる。堅穴建物跡とフラスコ状土坑がそれぞれ列状に並ぶ遺跡や1列に並ぶ遺跡がある。前者の例としては石江遺跡や稲山(1)遺跡、後者は新町野遺跡である。また、前者の土坑墓は集落内でフラスコ状土坑など他の遺構と混在し、後者はフラスコ状土坑群列からやや離れてつくられる。

稲山(1)遺跡や新町野遺跡の土坑墓の検出数は数基程度と少ないが、これらの土坑墓からは、副葬品とみられる石鏃や石槍が複数点出土するのが大きな特徴である。非常に豊富な例として、石江遺跡では、石鏃10点、石斧3点、石槍1点、石匙1点、削・搔器1点、玉髓原石2点、アスファルト入り土器1点が出土したものや、石鏃79点、長大な石斧1点、石匙2点、敲石1点が出土したものなどがある。早期末葉以降、豊富な数量、種類の遺物が出土する墓があるが、前期後半まで継続したものとみられる。

池内遺跡は台地の先端を挟むいくつかの沢に隔たれた上に、堅穴建物跡、フラスコ状土坑、土坑墓などの遺構が分かれて分布する集落として著名である。土坑墓計45基のうち、最も集中する部分では72mにわたり35基が検出された。長軸を揃えるように構築され、土器や石鏃、石槍などが複数点出土



多数の遺物が出土した円筒下層式期の土坑墓



牛湯 (2) 遺跡の土坑墓列と道路跡



図 5-21 他遺跡の事例 1

したものもある。副葬とみられるこれらの遺物の種類は、上記の青森市内の遺跡の内容と共通する点が多い。

縄文時代中期でも列状配置の集落がつくれ、中期初頭の八戸市笹ノ沢(3)遺跡や、前期末から中期前葉の蓬田村山田(2)遺跡が例として挙げられる。土坑墓は集落内に散在し、前期と同様検出数は少ないが、出土遺物は前期のような多種多様な石器の副葬はなく、笹ノ沢(3)遺跡では円形に近い土坑墓から土器の出土が目立つ。

前期末以降、土坑墓が並列し、墓域が形成される例が増える。中期の苦米地館野遺跡、中期中葉から後葉の富ノ沢(2)遺跡、槻ノ木(1)遺跡などがある。ただし、中期の土坑墓では出土遺物が少なく、前期とは様相が異なるものとなる。富ノ沢(2)遺跡では、土坑墓が検出され、並列する土坑墓が1か所、このほか並列するものが2か所あり、前者では出土土器は非常に少ないものの円筒上層式土器が、後二者からは中期後葉～末葉を中心とした土器が出土し、それぞれのまとまりは時間差の可能性が高い。また、土坑墓の周囲からピットが検出され、上屋があった可能性があるものもみつまっている。さらに道路跡に付随する遺跡としては、前期の石江遺跡を竈矢とし、牛潟(2)遺跡、二ツ森貝塚があり、後二者の道路幅は2m弱である。これらの土坑墓が列状に検出される遺跡には複数型式の土器が連続で出土するなど長期間継続した遺跡が含まれ、円筒土器文化圏で拠点的な集落と考えられるもの含まれる。

第2章第3節第1項では、本遺跡の土坑墓の規模をグラフ化し、土坑墓は前期より中期のものの短軸が狭くなることを示した。図5-22は本遺跡と上記の他の遺跡の土坑墓の規模を示したものである。本遺跡については時期が不明確なものは除外し、〈土坑墓①〉のうち出土遺物から前期と判断される土坑墓と、中期と判断される〈土坑墓④〉を用いた。これによると前期の土坑墓は長軸：短軸は3：2ほどであるが、中期では長軸のバラつきはあるが、短軸は50～80cm前後に収まり、前期にくらべ短軸が狭いことがわかり、本遺跡のデータと整合する。

以上は主に楕円形の土坑を土坑墓として挙げてきたが、円形の土坑にも土坑墓として使われた可能

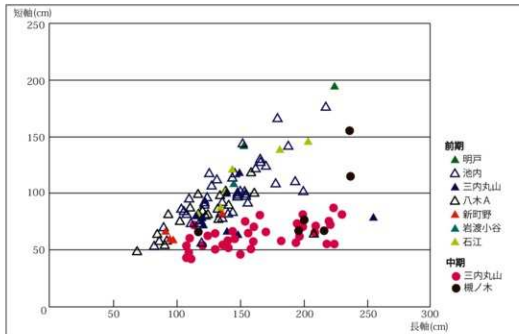


図5-22 土坑墓の規模

性があるものがある。今別町山崎(1)遺跡では径1mほどの土坑が集中して検出され、中からは中期中葉の土器や釅磨器類が複数出土したものもある。

(2) 環状配石墓(図5-23)

本遺跡以外で環状配石墓の検出例はごく限られている。それも規模が小さいもので、本遺跡のような直径4m前後に配石を巡らせた例はない。富ノ沢(2)遺跡では、本遺跡での配石墓のように、土坑墓より一回り大きく配石を巡らせたものが1基みつまっている。槻ノ木(1)遺跡では径2mほどの円形に近い楕円形の土坑の掘方より一回り小さく礫を巡らせたものがある。これらは中期のものである可能性が高い。また、北海道八雲町榮浜1遺跡からは掘方に沿うように礫が巡る、長軸150cmほどの土坑墓が検出され、確認層位から縄文時代中期から後期初頭の時期が考えられている。

五戸町西張平遺跡では円筒上層d式期の土坑墓の上面に、掘方と同規模で礫を巡らせている例がある。配石は隅丸長方形の掘方上面で一方の短辺側を半周し、土坑墓内では配石下で頭蓋骨や歯が出土した。本遺跡でも半周する配石があり、配石と埋葬頭位の関係を知る上で参考になるものである。

なお、岩手県一戸町の史跡御所野遺跡の集落の中心部から東西80m×南北50mの範囲で配石遺構群が検出されている。一帯を削平した後に配石を構築しており、集落内の墓域の構成要素と考えられる。集石状の配石が多いが、中には本遺跡と同様に環状に巡るものがある。しかし、環状の内部からは土坑墓は確認されていない。周辺からは土坑墓が、その外側には掘立柱建物跡が検出されている。

(3) 埋設土器(図5-23)

東北町古屋敷貝塚、北海道八雲町コタン温泉遺跡では、埋設土器から乳児骨が出土しており埋葬施設と考えられるものである。円筒土器文化圏では大面(1)遺跡や畑内遺跡の円筒下層a式期が最も古く、円筒土器文化期の初期から現れる。その後、円筒下層c～d式期に増加し、縄文時代前期の円筒下層d₂式期の埋設土器が96基検出された西目屋村水上(2)遺跡を筆頭に、岩渡小谷(4)遺跡、新町野遺跡・畑内遺跡が50基以上と突出して多く、稲山遺跡・石江遺跡・西張平遺跡、岩手県軽米町大日向Ⅱ遺跡では20基以上、黒石市板留(2)遺跡・鳴沢遺跡で10基以上検出されたほかは、数基程度がみつかる遺跡が多い。中期では初頭の笹ノ沢(3)遺跡から15基が、水上(2)遺跡では円筒上層式期で27基、大木系土器期で16基がみつまっているが、それほかでは5基未満の遺跡が大半である。

埋設土器は大面(1)遺跡や板留(2)遺跡などのように居住域の近くにまとまるものや、畑内遺跡や新町野遺跡のように居住域から離れた場所にまとまるものがある。円筒下層c～d₂式期を主体とした青森市岩渡小谷(4)遺跡では、沢を隔てた南北から堅穴建物跡が検出され、北側では堅穴建物跡の近く、南側では堅穴建物跡とは離れた場所で集中し、調査区際で確認された土坑墓と合わせて墓域が形成されている。埋設方法は正立以外に倒立、合わせ口、入れ子などがあり、本遺跡での居住域と墓域に集中する埋設土器の区別や、円筒下層式土器期の多様な埋設方法に共通性がみられる。

そのほか、居住域とは離れ、捨て場に埋設土器が集中する例として鯉ヶ沢町鳴沢遺跡、風間浦村沢ノ黒遺跡がある。また、石江遺跡、稲山(1)遺跡、水上(2)遺跡などの例では居住域が捨て場と重複し、そこに埋設土器が集中する。以上のように、埋設土器は堅穴建物跡の近くからみつかるもの、土坑墓とともに墓域を形成するもの、捨て場につくられるものの3種が確認できる。

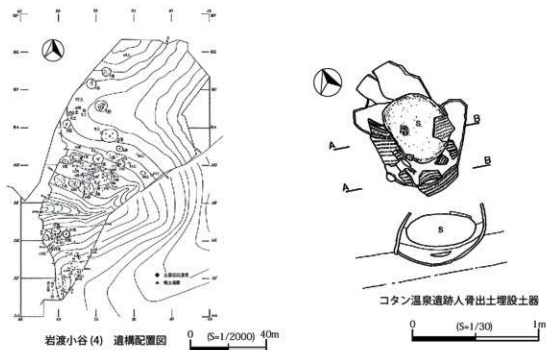
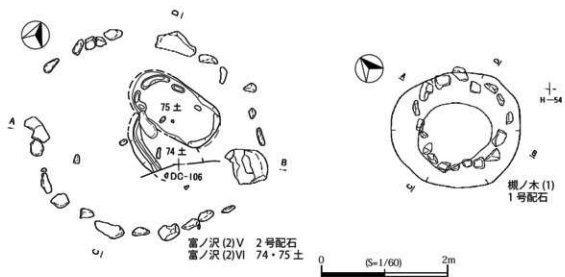


図5-23 他遺跡の事例1

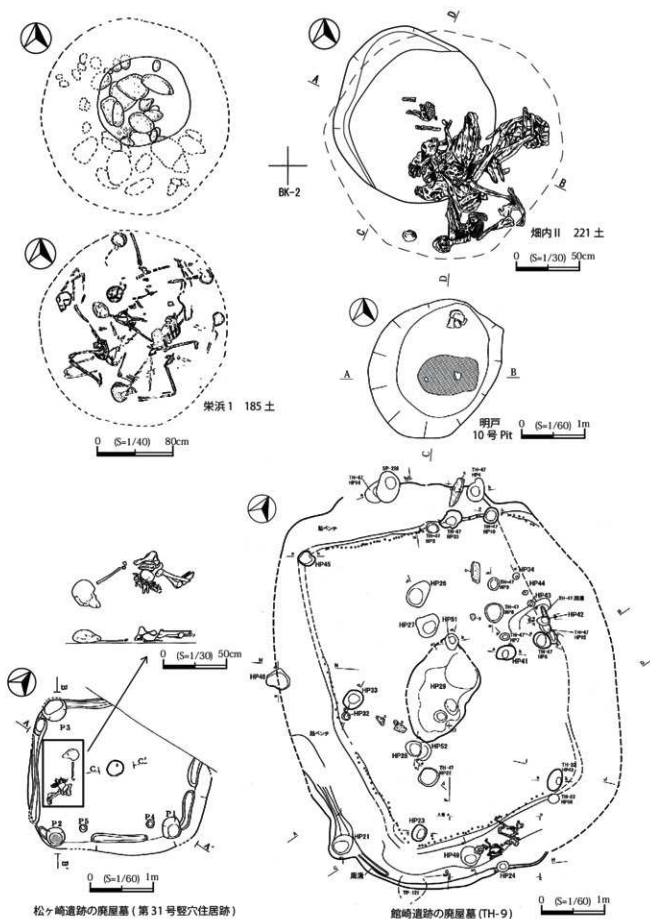


図5-24 他遺跡の事例2

(4) その他の葬送関連遺構 (図5-24)

縄文時代前期末の畑内遺跡や古屋敷貝塚、中期初頭の二戸市上里遺跡、中期と推定される二ツ森貝塚、栄浜1遺跡などではフラスコ状土坑から単体あるいは複数体の人骨が検出された。畑内遺跡ではベンガラが確認されたフラスコ状土坑もあり、人骨は残存しないものの埋葬施設に転用されたフラスコ状土坑は多かったと想定される。

北海道福島町館崎遺跡では前期末葉、八戸市松ヶ崎遺跡では榎林式期の堅穴建物跡(廃屋墓)から人骨が検出された。また、埋葬施設ではないが、本遺跡の北の谷でみつかった人骨と同様、東北町東道ノ上(3)遺跡では、貝塚から人骨の一部が出土した。

3 まとめ

本遺跡では、縄文時代前期末葉以降、時間的に重複しながら4か所の土坑墓列がつけられた。そのうち2か所の土坑墓列は長さ3~400m前後に及び、集落内を横断する大規模な道路に付随する。土坑墓はこれまでの調査で約400基検出されている。試掘調査によって確認されたものが多く、実数はさらに増える。これらのうち、緊急調査を実施した土坑墓の3割ほどから狩猟具や調理具などの石器が出土し、副葬品と考えられるものである。

埋葬施設には土坑墓、埋設土器などがある。個別にみると、土坑墓の埋葬施設では平面形や規模、壁溝の有無、上部構造では配石の有無や規模、副葬品の有無などに違いがある。また、時間的に重複する各土坑墓列の場所の違いもある。さらに小児用甕棺とみられる埋設土器では、土器の埋設方法に違いがあるなど多様である。その多様さは均質なものではなく、中期の土坑墓に対する環状配石墓や、前期の埋設土器での単体の正立の埋設の多さに対する少数の合わせ口や入れ子などの埋設形態のように、多に対するごく少数が存在する。このような違いは、構築年代のほか年齢階梯や性別、生前の集落内での役割や死因など、被葬者の何らかの特徴が反映されたものであろう。

円筒土器文化圏内において本遺跡の墓域の規模は他の遺跡に比べ非常に大きい。個別の土坑墓や埋設土器の数も群を抜いて多い。集落の継続と連動し長期に渡る墓域の形成は、定住による生活基盤の安定と精神文化の充実によるものであり、円筒土器文化における大規模拠点集落のあり方を示すものである。

(小笠原)

(註1)「環状配石墓」の呼称は、平成11年度以降の南西側の道路跡周辺の調査によって検出した、土坑墓の周囲に大振りな配石遺構を伴う一連の遺構として認識されたことから命名されたものである(青森県教育委員会2003)。それ以前の旧運動公園西駐車場際の調査(青森県教育委員会1977)、旧野球場建設予定地の調査(青森県教育委員会1994)、第7次調査(青森県教育委員会1998)などでは、土坑と配石にそれぞれ別に遺構番号を付し、「配石」や「配石遺構」と呼称した。必ずしもすべての配石が環状に巡るとは考えていないが、煩雑さを避けるため、第2章第3節第2項を踏襲し、環状配石墓と総称する。また、環状配石墓は、土坑墓の部分を「埋葬部」、周囲の配石を「配石部」として区別して呼称する場合がある。

第4項 捨て場（縄文時代前期）

1 三内丸山遺跡における縄文時代前期（円筒下層式期）の捨て場

第2章第8節では、縄文時代前期の円筒下層式期の捨て場として、低地に形成された捨て場と、竪穴建物跡の窪地に形成された捨て場を取り上げた。

本遺跡の集落が営まれる台地が途切れる沖館川に面した低地にあたる第6鉄塔地区や、沖館川に向かって開口する「北の谷」から大規模な捨て場が確認された。「北の谷」の範囲は南北約80m、東西約20mである。沖館川に面した低地の捨て場は範囲が不明確だが、第6鉄塔地区から西へ約150m離れた第9次調査区でも捨て場の一部がみつまっている。

これらの低地には大量の土器や石器のほか、低地の水分を多量に含んだ層であることから、骨角器や木製品、動植物遺体などの有機質遺物が良好に残存していた。

また、竪穴建物跡の堆積土中に形成された捨て場からは多数の土器や石器などが出土することがあり、本遺跡において円筒下層b式期以降、円筒下層式各型式における捨て場が確認されている。

捨て場がつけられる時期としては、沖館川に面した低地では前期中葉の円筒下層a・b式期の遺物の包含量が多く、前期後～末葉の円筒下層c・d式期では相対的に少ない。遺跡北西部の第9次調査区では前期後から末葉の捨て場がみつかり、北の谷では捨て場としての利用が継続する。また、台地上の竪穴建物跡への堆積土中への廃棄が目立つようになり、さらに前期末葉には西盛土の形成が始まることから、廃棄場所や廃棄物の内容などに変化があったものとみられる。

なお、本遺跡では廃棄された遺物が多量に出土する範囲を捨て場や盛土と言っている。盛土は人為的な土砂も含めた廃棄により地形が改変された範囲と定義すれば、捨て場はそれが顕著ではなく遺物が廃棄された範囲となる。ここでは窪地や低地で形成された捨て場を、次項では地形改変された盛土を取り上げる。本遺跡での盛土の形成は中期から本格的になるが、後で触れるように地域によって現れる時期に違いがある。

2 他遺跡の類例（図5-25～27）

円筒土器文化期の遺跡からは捨て場が見つかることが通例で、しばしば大規模なものとなる。捨て場は本遺跡と同様に、①竪穴建物跡の堆積土中や居住域と同じ台地上、②急斜面や低地に形成され、一つの遺跡から両者が検出されることもある。

円筒下層a式期以降、①の竪穴建物跡堆積土中から捨て場が検出された例は、量の多少を問わなければ枚挙にいとまがない。遺物が多量に出土した例として青森県内だけでみても、平川市大面(1)遺跡、つがる市田小屋野貝塚、東通村石持納屋遺跡、つがる市石神遺跡などがある。廃絶した竪穴建物跡の窪地に捨て場が形成されるのは円筒下層a式期以降、円筒下層式期を通じて確認される。つがる市田小屋野貝塚、中泊町深郷田遺跡などでは竪穴建物跡の堆積土中に貝塚が形成される。捨て場は竪穴建物跡の堆積土中のみならず、その外側まで広がるのがしばしばあり、周辺も含めた場としての継続的な利用を示すものであろう。集落内では竪穴建物跡が一定の場に継続的に構築されることがあり、捨て場は結果として竪穴建物跡の近く、あるいは重複して見つかることも多い。このような例としては、青森市稲山遺跡、石江遺跡、大鰐町大平遺跡、木古内町釜谷遺跡、久慈市外里遺跡、軽米町大日向II遺跡などがある。

また、むつ市熊ヶ平遺跡や黒石市板留(2)遺跡などのように、堅穴建物跡などの遺構分布がないか希薄な、集落の緩斜面に捨て場がつくられることもある。

そのほか、堅穴建物跡など居住施設がなく、捨て場のみが見つかる例がある。青森市内三内沢(1)遺跡では、おおむね6×9mと9×15mの範囲で捨て場が形成され、近接していることから両者は一連の可能性がある。今別町山崎(1)遺跡ではおおむね20×20mの範囲で捨て場が形成され、周辺に同時期の居住域の存在が予想される。

②の居住域がつくられる台地上とは異なる斜面や低地から大量の遺物が出土した例として、青森市熊沢遺跡、東北町東道ノ上(3)遺跡、軽米町大鳥I遺跡、大館市山館上ノ山I遺跡などが挙げられる。また、低地に捨て場が形成された例として、青森市岩渡小谷(4)遺跡、宮田館遺跡、弘前市神原(2)遺跡、野辺地町向田(18)遺跡、蓬田村山田(4)遺跡、八幡平市横間II遺跡、大館市池内遺跡などがある。これらのうち多くの遺跡では有機質遺物も出土した。時期的には円筒下層a式期から円筒下層d₁式期のもので、本遺跡と共通する。

池内遺跡は集落全体が調査され、円筒下層式期の遺構配置など全体像を知るうえで重要な遺跡である。遺跡では大小の4か所の谷と台地縁の斜面に、円筒下層a・b式期の捨て場、その上層に人為堆積層を挟み、円筒上層c・d式期の捨て場が検出されている。谷の捨て場からは木製品、動植物遺体などの有機質遺物が出土した。本遺跡の第6鉄塔地区ではニワトコを主とした堆積層が確認されているが、池内遺跡でもニワトコなどの種子が袋に入れられたような塊の状態で出土している。

上記の①と②の双方が見つかった顕著な例として、ダム建設に伴い円筒下層式期の集落全体を本発掘調査した八戸市畑内遺跡がある。捨て場は6か所から検出された。円筒下層a・b式期では廃絶した堅穴建物跡も含めた居住域の近くと離れた場所で見ついている。円筒下層c・d式期の捨て場は居住域の周縁で見ついている。普代村力持遺跡でも密集する堅穴建物跡の堆積土中から多量の遺物が出土したほか、遺構が分布しない斜面に捨て場がつくられている。

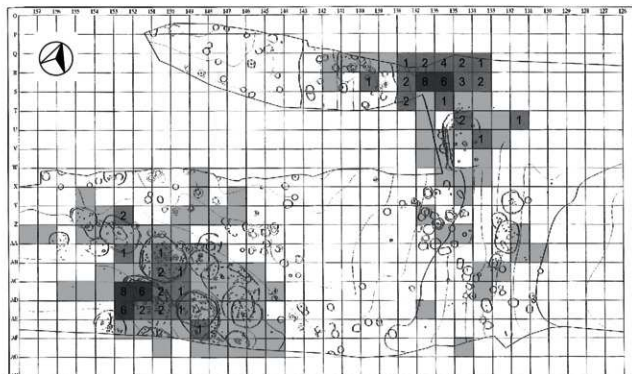
堅穴建物跡の堆積土や斜面、低地への廃棄には土砂も含まれていた可能性もある。しかし堆積物すべてが人為的な廃棄によるものか、人為的な廃棄物(土器片や炭化物など)とともに碎屑物が自然に窪地へ流れ込んだものか、判断が難しいことが多い。

その一方で、北海道では盛土が確認されている。北海道両館市八木A遺跡の盛土は円筒下層a・b式期のもので、堅穴建物跡群に沿うように検出された。北斗市館野6遺跡、木古内町大平遺跡、福島町館崎遺跡などでは堅穴建物跡と重複して検出されている。北海道では前期の盛土の検出例が多く、本州に比べいち早く盛土の形成が開始された。

3 まとめ

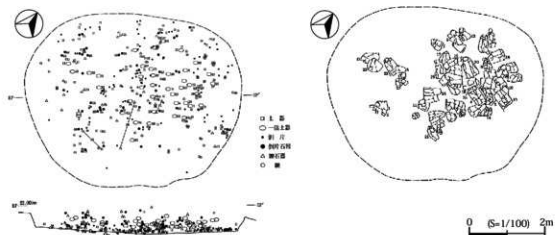
本遺跡の縄文時代前期の捨て場は、堅穴建物跡の窪地や低地に形成される。北の谷や第6鉄塔地区の低地の捨て場からは円筒下層a式期以降のおびただしい量の遺物が出土した。両者は150mほど離れており、第6鉄塔地区から西へ約150mには前期後葉から中期の捨て場が検出された第9次調査区がある。これらが一連のものであるか確認が必要であるが、台地下には大規模な捨て場の存在が想定される。

本遺跡では縄文時代中期になると盛土の形成が本格化する。遺物はそこから多量に出土するように

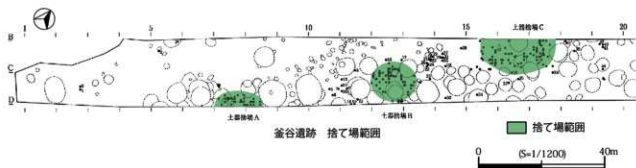


凡例 ■ 1箱未満 ■ 1~5箱 ■ 6箱~

稲山遺跡の遺構配置図と円筒下層式期の遺物出土量



釜谷遺跡 第31号竪穴住居跡遺物出土状況



釜谷遺跡 捨て場範囲

図5-25

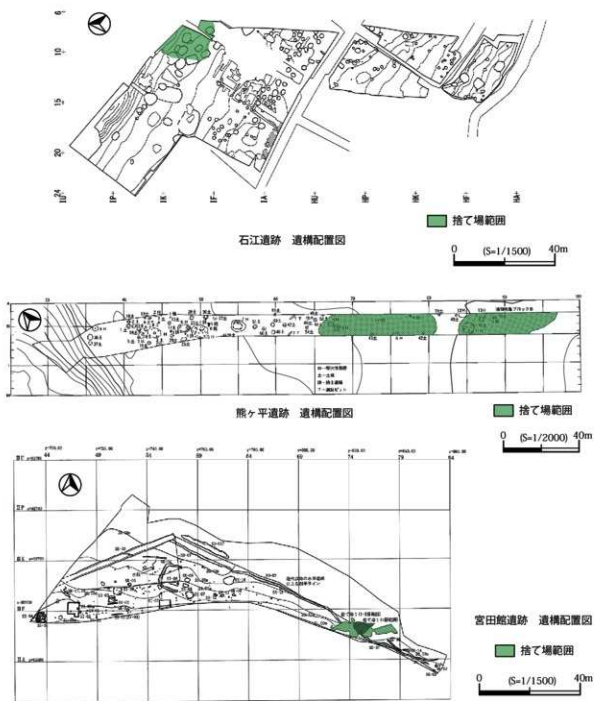
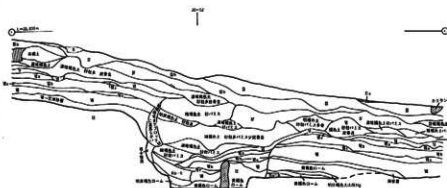
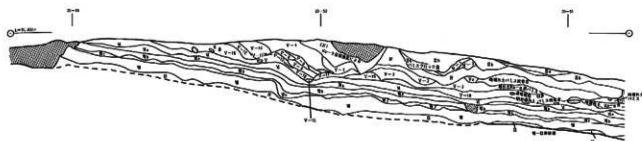


図5-26

なり、円筒下層式期とは大きく異なったものとなる。なお、窪地や低地でも炭化物などを多量に含むなど人為的な土砂の廃棄層が確認されることがあり、盛土との明確な区別は難しいことがある。

捨て場は、規模の大小は別として、縄文時代早期中葉以降の縄文時代の集落遺跡の構成要素の一つとして検出される。円筒下層式期の遺跡の捨て場からは遺物が多量に出土することが特徴といえる。大規模あるいは長期的な捨て場は、集落における継続的な土地利用や土地への定着を示していると考えられる。

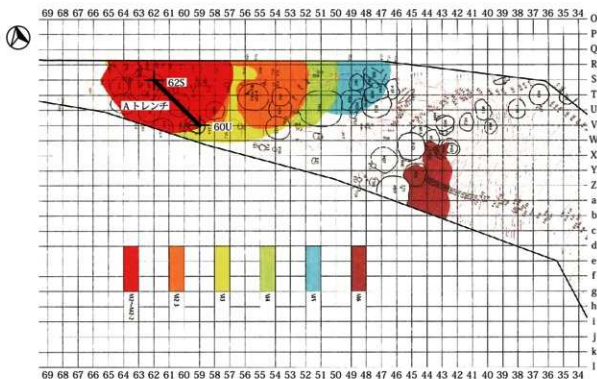
(小笠原)



- 60-1層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-2層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-3層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-4層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-5層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-6層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-7層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-8層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-9層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-10層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-11層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-12層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-13層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-14層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-15層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-16層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-17層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-18層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-19層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-20層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-21層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-22層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-23層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-24層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-25層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-26層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-27層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-28層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-29層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-30層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-31層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-32層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-33層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-34層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-35層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-36層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-37層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-38層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-39層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-40層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-41層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-42層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-43層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-44層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-45層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-46層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-47層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-48層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-49層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-50層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-51層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-52層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-53層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-54層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-55層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-56層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-57層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-58層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-59層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-60層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-61層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-62層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-63層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-64層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-65層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-66層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-67層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-68層 遺跡層(土) 61S, 62S
- 60-69層 遺跡層(土) 61S, 62S

八木A遺跡II 盛土土層断面

0 (S=1/30) 1m



館野6遺跡 盛土推定分布図

0 (S=1/1,000) 20m



館野6遺跡 Aトレンチ土層断面図

0 (S=1/120) 2m

図5-27

第5項 盛土（縄文時代中期）

円筒土器文化の盛土は、人為的な掘削によってもたらされた土を母材とし、層中から多量の遺物が出土することを特徴とする。その主たる成因は、土と遺物の累積的な廃棄行為にあり、堆積に要した期間は、土器型式にして5から10型式、一千年以上の長期におよぶ例も知られ、大規模な塚状の形態へと発達していることが多い。本項では、これまでの調査で明らかにされた土層や形成過程に関する情報を整理し、同時代の事例と比較しながら三内丸山遺跡の盛土の特徴についてまとめる。

1 三内丸山遺跡の盛土

(1) 集落内の配置

円筒下層式期には、集落に接する谷の内部や台地縁辺部の急崖等に大量の遺物廃棄がみられ、三内丸山遺跡にも第6鉄塔地区や北の谷のような谷地形に形成された「捨て場」が認められる（第2章第8節第1項）。居住や作業の場に適さない土地を廃棄物の集積地として利用することは、集落内に一定の活動領域が確保されるという意味においても合理的であるため、時期を問わず、同型の事例が各地に存在する（小林ほか2011、小林2012）。

一方で、円筒上層式期には、炭化物や焼土、二次堆積のローム質土が土器などの遺物とともに廃棄され、それらが積み重なってきた「盛土」が増加する。盛土は、台地上の平坦地から斜面にかけての傾斜変換点付近に形成されることが多く、三内丸山遺跡で確認された3か所の盛土も、平坦地または緩斜面地に立地している。

盛土と他の遺構の平面的な位置関係をみると、三内丸山遺跡の盛土はいずれも道路跡（墓列）の一端に取り付くような形で配置されている（図5-28）。また、北盛土や西盛土の縁辺部には堅穴建物跡の重複がみられ、盛土の範囲内からは埋設土器と焼土遺構が検出されている。それらは盛土の堆積層の間に重層し、特に西盛土では前期末葉から中期前半の時期に、盛土の形成と土器の埋設、火を焚く行為が一定の範囲内で重なりながら累積した様子が確認されている。

(2) 土層の基質・混入物

盛土に堆積する土層の内容をみると、地山（第Ⅵ・Ⅶ層）に由来するローム質土が大量に含まれており、堆積層の間に顕著な土壌発達は認められない。混入するロームブロックの大きさと形状、炭化物や土器片の多少、土の硬さは、層毎に異なり一様ではない。このことは、盛土形成の背景にある行動に、様々な内容があり、土量や堆積に要した期間、廃棄された土の状態が時期や地点によって異なっていたことを示している。

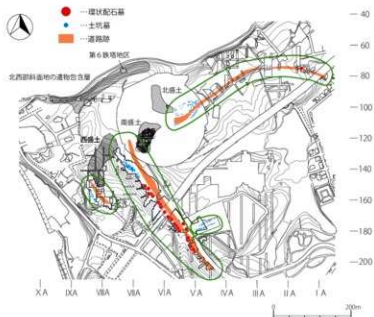


図5-28 墓・道路・盛土の配置

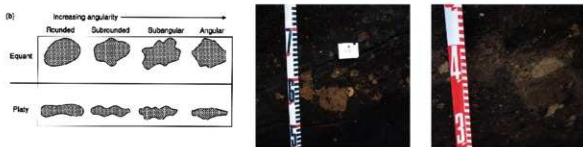


図5-29 堆積土中にみられるロームブロックの形状（西盛土）

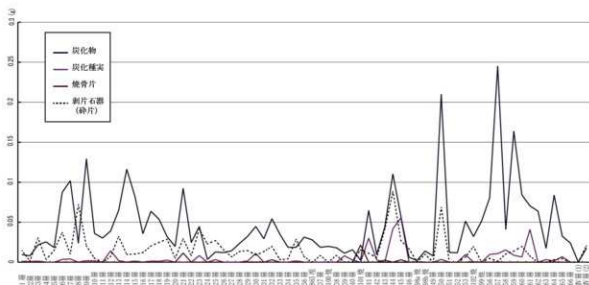


図5-30 西盛土（A1区）に含まれる層別別微細遺物重量比

る（辻本2014）。

堆積が薄く、単位が比較的小規模に捉えられる部分には、炭化物や焼土粒、ロームブロック、土器片、石器等が混じり、土とともに様々な生活残滓が廃棄された様子がうかがえる。一方、単位が厚く捉えられる部分については、土以外の混入物がほとんどみられず、ほぼロームブロックのみで構成される層や黒色土の中に比較的大型のロームブロックが混じる層などがみられる。後者の部分で確認されるロームブロックには風化や磨滅がみられず、掘削時の形状がそのまま保存されていると考えられるものもあり、基本的には土木作業に伴って生じた大量の土砂残土が短期間で集積されたものと考えられる（図5-29）。

第33・34・35次調査では、西盛土の堆積土の一部を層毎に水洗選別し、微細な混入物の内容確認を実施した。その結果、土層中には、炭化材、炭化種実、焼骨片、石器製作残滓が様々な割合で含まれていることが確認された（図5-30）。また、焼骨片や炭化種実等の動植物遺体、炭化材の樹種については、可能な限り種を特定し、詳細な内容把握に努めているが、骨片には哺乳類（シカ）、鳥類、魚類（タイ科、サバ属、カタクチイワシ、サケ属、ハゼ科）などが含まれており、特定の動物種に偏らないことがわかった。さらに、炭化種実はクリとクルミが多く、マメ科やサルナシ、ヒエ属など食料として利用された種類が多く含まれること（吉川2012、佐々木2013）、炭化材の樹種は大半がクリであること（國木田2012a）等が明らかとなった。

(3) 出土遺物の特徴

三内丸山遺跡の遺物について、出土遺構種の傾向をみると、捨て場や盛土から出土したものが圧倒的に多く、全体の約7割を占めている。盛土から出土した遺物の構成をみると、土器や石器等、日常生活用具が土偶やミニチュア土器等の祭祀具よりも多いが、両者の比率を他の遺構（竪穴建物跡・土坑）と比較した場合、盛土においては前者に対する後者の割合が著しく高い。また、遺物種毎にみた出土遺構の傾向としては、石棒や土偶、ミニチュア土器等の祭祀具、耳飾りや垂飾品等の装身具は盛土からの出土が多いことも確認されている（図5-31）。

盛土から出土する各遺物の出土状況については、土器は碎片が炭化物やロームブロックとともに土層中に混入した状態で確認されることが多いが、一方で個体が押しつぶされたような状態で層理面から出土する例も比較的多くみられる（図5-32③・④）。それらは破片同士を継ぎ合わせると完形に近く復元されるため、欠損のない各個体がそのまま廃棄されたと考えられる。また、石器は、土器の破片と同様、土層中に混入した状態で出土することが多いが、やはり欠損のない完形品もみられる。土器と異なり、廃棄の状態が捉えにくいのが、南盛土からは両面調整石器の加工に伴って派生した碎片的集積が検出されており、接合関係の検討から製作残滓がまとめて廃棄されたか、または遺棄されたものと考えられている（齋藤2015）。

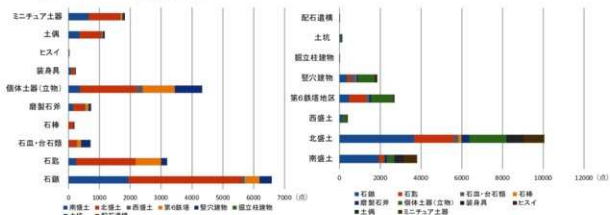


図5-31 遺物出土量（左：各遺物別、右：各遺構別）

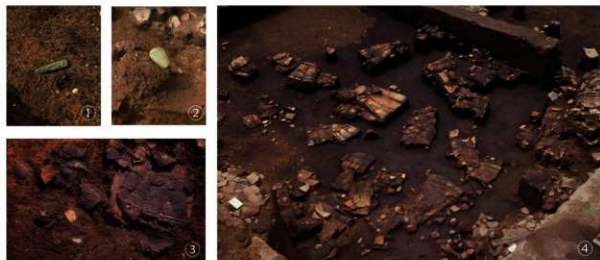


図5-32 北盛土の遺物出土状況（①装身具、②岩偶、③土偶・個体土器、④個体土器）

装身具も石器と同様に廃棄の状態を把握することが難しい。完形の珧状耳飾やヒスイ製大珠が南盛土や北盛土から出土しているが、いずれも欠損がみられず廃棄の直接的な動機は物理的な破損に求められないものである。

土偶も土器の碎片や石器と同様、多くは層中に破片が混じった状態で出土している。破片同士に接合関係が確認されることもあるが、その多くは出土地点が離れ、また、完全に復元されることは稀である（第3章第3節図3-18）。北盛土と第349号住居跡から出土した破片同士が接合した大型板状土偶（第3章第3節図3-21-1）は、個体が完形に復元された希有な例だが、出土地点間の距離は約90 m離れている。石棒・石刀・石冠は、焼けはじけ等の被熱痕跡が伴うことが多いが、多くは破片の一部が単独で出土したもので、焼土遺構に伴った状態では確認されていない。

（4）形成過程

第33・34・35次調査では、土壤微細形態分析と針貫入試験による土壤硬度の計測（小林2011、辻本2012）や花粉・プラントオパール分析を行い、西盛土を構成する堆積物に関する徹底したデータ収集が行われた。また、混入する炭化材の放射性炭素年代測定値から、層序と年代値の整合性に関する検討を行い、形成過程を検証した（安2013、國木田2012 a）。それらの分析結果をふまえ、西盛土の中心部（Aトレンチ、A1区）の内容から形成過程を復元する。

① 縄文時代前期末葉（円筒下層d₂式）

西盛土Aトレンチ周辺では、第IV層の上部に検出された廃棄土層が最も古い堆積層であり、前期末葉に遡る。この時期の土層の色調は黒褐色土を主体とし、ロームブロックの混入が著しい。また、層中には土器の碎片が含まれ、層理面には、個体がまともって出土する部分もみられる。一部、均質な



図5-33 盛土内で検出された焼土・埋設土器・廃棄層（①②：西盛土、③④北盛土）

ローム層が厚く堆積する部分があるが、層の規模には大小のばらつきがみられる。

均質なローム層が厚く堆積する部分には、混入物がほとんど確認されない。また、土壌の微化石分析では、クリの花粉塊が検出されるなど、掘り上げられた土がそのまま運ばれ、一気に廃棄されたものとみられる。このローム層の由来については、ロームブロックの土質と色調観察に基づく基本土層との対比から、道路跡の造成土、もしくは同時期に西盛土縁辺部に存在した大型住居跡の掘方掘削土との関連が推測されている。また、廃棄の起点は緩斜面の上部側にあり、徐々に下部側へと拡張していった様子が捉えられている。

② 縄文時代中期前葉（円筒土層 a₁～c 式）

比較的小規模な廃棄が主体となり、層毎に土の特徴（色調・土質）と遺物の混入率が大きく変化するようになる。この時期の土層断面には、堆積層が薄く縞状に堆積する様子がみられ、土を廃棄した後に敷きならしや踏みしめが繰り返されたとみられる。ただ、土層の積み上げ方に規則性は認められず、大規模な構造物を作ろうとする意図は読み取れない。また、この時期には、火を焚く行為と土器の埋設が頻繁に行われており、層断面における個体土器出土も多くみられる。

③ 縄文時代中期中葉（円筒土層 d・e 式）

基本的には中期中葉と同様の傾向が継続するが、土砂の大量廃棄を思わせる均質で分厚いローム質土層の堆積もみられる。西盛土の西側縁辺部には、中期中葉の竈穴建物跡が検出されており、遺構掘削時に生じた残土が土砂の積み立てにつながったと考えられる。その際、より古い時期の遺構に伴う炭化材や遺物が掘り起こされ、一緒に廃棄されることもあったとみられる（岡木田2012b）。また、焼土遺構と埋設土器については、中期中葉から数が減少するものの、層断面からの個体土器出土は依然として多い。

④ 縄文時代中期後葉（複林式）

土器は碎片の状態ですら層中に混入して出土するものが大半を占める。中期中葉以前と同様、混入物にロームブロックや炭化物、焼土粒が多く含まれる。その一方で、これ以前にあるような層相の細かな変化を確認することはできず、土層の細分が困難な部分が多い。また、焼土遺構や埋設土器の検出はみられなくなり、ローム質土の廃棄も減少する。この時期の堆積層の厚さは全時期を通して最も薄く、中期中葉以前とは、形成要因に変化が生じている可能性がある。

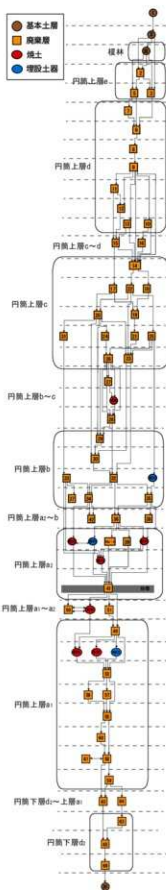


図5-34 西盛土（AI区）層序概念図

2 円筒土器文化の盛土

円筒土器文化の盛土は、「捨て場」や「遺物包含層」、「土器塚」等の名称で報告されているものも含めると、現在までに約100遺跡で確認されている。それらの中から、三内丸山遺跡の盛土の認定条件(第2章第8節第2項)に合致する前期末葉から中期前半期の代表的な事例を取上げ、その内容を概観する。

(1) 石神遺跡

青森県西部、つがる市森田町大字床舞字石神に所在する。標高10～15mの台地先端部に立地しており、円筒土器文化の拠点集落の一つと考えられている。1965・67年に石神遺跡保存会が実施した調査で円筒下層a式から円筒上層d式までが層位的に出土する遺物包含層が確認され、その後の円筒土器研究の基礎資料となった(森田村教育委員会1970)。2001年に森田村(現つがる市)教育委員会が実施した内容確認調査で、この遺物包含層が土層の特徴から盛土の一部であることが判明し、前期中葉～末葉の堆積層に貝層が含まれることも確認された(図5-35)。

平面規模の詳細は不明であるが、2001年度の調査では、トレンチの土層断面から、最大で1m45cmに達する堆積層が確認されており、当初の調査で「黄色火山灰層」と呼ばれたローム質土層の薄層の堆積に加え、土層中に大量の炭化物が含まれていること等が報告されている(つがる市教育委員会2015)。

(2) 中の平遺跡

青森県津軽半島、外ヶ浜町字三厩中ノ平に所在する。標高約25mの海岸段丘上に立地する縄文時代前期から晩期にかけての遺跡である。1972・73年に青森県教育委員会が実施した発掘調査で円筒下層d式から最花式及び十腰内I式の土器を大量に含む遺物包含層が調査されており、特に円筒下層d式から円筒上層e式にかけて、層位的に連続して出土する様子が確認されている(青森県教育委員会1975)。部分的な調査であったため、全体規模は不明であるが、堆積層の厚さは最大約2mとされる。「褐色火山灰質」の明黄褐色土と暗黄褐色土が互層をなして堆積することや焼土層が介在することなど、三内丸山遺跡の盛土の特徴と共通する。土層中に焼骨片や焼土粒、大量の炭化物を含み、円筒下層d式から円筒上層a式を中心に数十点にもおよぶ完形土器が直立・倒立状態で出土している。特に後者は、円筒土器文化に特有の廃棄状況「中の平パターン」(鈴木1975)として紹介され、注目された(図5-36)。



図5-35 つがる市石神遺跡
(つがる市教育委員会 提供)



図5-36 外ヶ浜町中の平遺跡
(青森県埋蔵文化財調査センター 提供)

(3) ニツ森貝塚

青森県東部、小川原湖南部の西岸から西方に約3.5km、七戸町貝塚家ノ前に所在する。標高約32mの台地上に立地する縄文時代前期中葉から中期後葉にかけての拠点集落である（図5-37）。

1999年から2005年にかけて天間林村（現七戸町）教育委員会が実施した内容確認調査によって、東地区斜面の落ち際を中心に、12か所の貝塚が検出されているほか、東・西・北地区には、土器・石器等の遺物に比べて貝類の廃棄が少ない「捨て場」が確認されている。中でも東地区捨て場は、長さ約70m、幅約20mにわたって帯状に広がり、堆積層の厚さは1mに達する。部分的に東地区第Ⅱ号貝塚の範囲と重なり、周囲よりも高まりがみられ、ローム質土の連続的な積み立てが確認されたことから、「盛土遺構」として区別されている（七戸町教育委員会2007）。形成時期は円筒下層d式から円筒上層a式であり、円筒下層a式を主体とする北地区捨て場や円筒上層d式～覆林式を主体とする西地区捨て場とは年代が異なる。土層中にはロームブロックの他、炭化物、焼土、軽石等が含まれ、大量の土器・石器が出土している。

(4) 館崎遺跡

北海道松前半島の南岸、福島町字館崎に所在する。津軽海峡に面した標高27mの舌状台地の緩斜面部に立地する縄文時代前・中・後期を中心とした遺跡である。1984年に実施された福島町教育委員会の調査では、人為的な廃棄に伴う堆積物がマウンド状の地形を形成している状況から、「土器塚」として認識され、遺物出土状況の分析により、「送り」に関わる場と考察されている（図5-38）（福島町教育委員会1985）。

その後、2009年から2011年には、(財)北海道埋蔵文化財センターが以前の調査地点の隣接区域で発掘調査を実施し、盛土と並行して墓や道路跡、住居跡が列状に展開する様子が確認された。また、盛土の形成過程についても各時期の遺物出土状況と土層の広がり、遺構配置の変化についての検討が加えられており、集落構造の時期変遷が明らかにされている（影浦2014、福井2017）。

盛土に含まれる遺物の年代は円筒下層d式から円筒上層e式を主体とし、層位毎に型式内容が変化の様子が確認されている。推定長軸40～50m、短軸25～30mで帯状に広がり、土層の厚さは最大で2mに達する。暗褐色土やローム、およびそれらの混じり合った土が互層をなして堆積し、層中には

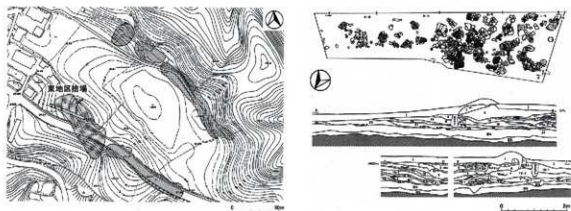


図5-37 七戸町ニツ森貝塚

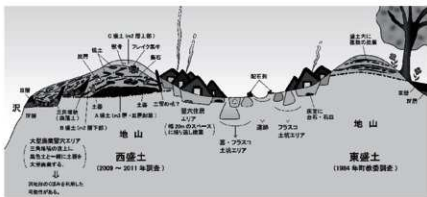
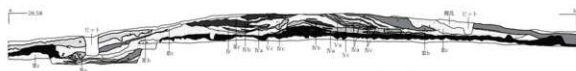


図 5-38 福島町 館崎遺跡

焼土や炭化物、焼骨片の混入もみられる。また、完形土器や祭祀遺物の出土も多く、三内丸山遺跡の盛土と似た特徴がみられる。「埋設土器」については、掘方が確認されず、設置したものに土をかぶせるなどして盛土の土層中に埋没した状況が想定されている（(公財)北海道埋蔵文化財センター2017）。

(5) サイベ沢遺跡

北海道函館平野に面したサイベ川左岸、函館市桔梗町に所在する。標高約25mの河岸段丘上に立地する縄文時代前期後葉～中期中葉の拠点集落である。1949年に実施された市立函館博物館の発掘調査で円筒下層c式から円筒上層d式（サイベ沢Ⅷ式）まで層位的に連続する大規模な遺物

包含層が見つかり、炭化微粒を含む粘土またはローム質土層、赤褐色土層が無遺物層を挟みながら互層をなして堆積していることが確認されている。平面的な広がりについては不明であるが、堆積層の厚さは第一地点で約5.4m（図5-39）、第二地点で約3.5mに達することが判明している。また、層中に貝層が検出されており、人骨の出土もみられることから墓が含まれていた可能性がある。炭化物の中にはクルミ・マメ科を含む炭化種実の混入もみられ、報告書では土偶等の祭祀に関連した遺物が多いことにも言及されている（市立函館博物館1958）。



図 5-39 函館市 サイベ沢遺跡

3 盛土の役割

三内丸山遺跡をはじめとする各地域の調査の増加に伴い、円筒土器文化の盛土のデータの蓄積は大幅に進展した。次に、これまでの調査データを総合して、現時点で考えられる盛土の役割について述べてみたい。

まず、盛土から出土する遺物の内容は、土器片、石器製作残滓、炭化物、骨片等が中心であり、基本的には日常生活の中で生じた生活残滓と捉えられるものである。盛土を特徴付けるローム質土層

も、道路跡や大型建物跡が盛土近くに構築され、基本土層との対比から、集落内の土地造成や遺構構築に伴う土の廃棄に伴うものと考えられる。つまり、生活残滓や残土類を一定の範囲に集積したことが盛土形成の一因と考えられる。

一方で、円筒土器文化の盛土はその範囲内から火を焚く行為と土器を埋設・安置する行為が長期間、継続的に繰り返された様子が確認され、生活残滓の廃棄に留まらない特別な場の機能が付与されていた様子がうかがえる。特に廃棄を繰り返しながらも同一地点で反復・回帰的に火を焚く行為と土器埋設が累積して行われていることは重要で、一見単純な生活ごみの片付け行為と認識される廃棄層も、埋葬やこれに伴う儀礼行動の文脈から活動痕跡の読み解きが必要である(谷口2008)。特に、道路跡と墓、盛土は、集落の存続期間中、空間利用の固定化を生じさせ、世代を超えて場の利用が長期間継承されており、反復・回帰的な行動パターンが数百年にもわたり継起した可能性がある。墓域の継承や道路の維持に伴い、特別な場の意識(阿部2003・2004)が醸成されていたことを想像する。

道具の廃棄と埋葬の重なりについて、両者の関連性に注目し、「送り」との関係を指摘する意見がある(河野1935、岡村1996)。アイヌ文化期以降の送り場にみられる遺物出土状況の中には道具を意図的に破壊し、機能を強制的に停止させたと考えられる例もあり、盛土で検出される個体土器や欠損のみられない装身具類の出土状況に通じる。また、盛土から出土する炭化した堅果類のうち、特にクリ・マメについては基本的に食用となる部位が炭化した状態で出土するため、食料残滓としての理解に加え、祭祀的な側面から評価する視点も必要である。

土偶や石棒、ミニチュア土器といった祭祀具が多く集まることも盛土の特徴であり、盛土形成の場が単なる不要物の集積地に留まらないことを示唆する。ただ、一方でそれらの出土状況を見ると、同複数の個体が焼土遺構の周辺からまとまって出土するような事例や、儀礼後の遺棄的な状況を示すものは少なく、盛土内で行われた活動内容については不明な点が多い。遺物出土状況に一層の注意を払い、形成過程の検討を重ねていく必要がある。

4 課題

長期間にわたる廃棄行為によって形成された盛土は、集落内で繰り広げられた人々の営みが凝縮された情報源でもある。盛土とよく似た性質をもつ貝塚については、集落のライフヒストリーを解明する目的で、廃棄単位を抽出し、各層の内容物を定量的に解析する作業が行われている。動物遺存体の分析では堆積層の季節性復元が行われ、生業の季節的な変化や集団の定着性についても検討がなされてきた。

多様な層相をその特徴とする盛土についても、発掘調査では、分層を徹底して行い、個々の層の内容物を定量的に比較することが基本となる。しかし、現状は、個々の遺跡について形成過程の検討ができる報告は少ない。盛土の内部からは、廃棄以外の活動痕跡が検出される可能性が高く、当面は、それらの内容を可能な限り拾い上げて、時系列に即した集落景観に位置づけ、盛土形成の流れを俯瞰する作業が必要である。そうした分析・復元作業を通じ確認された事実を積み重ねることで盛土の性格を明らかにする手がかりが得られると考える。

(齊藤(慶))